

2010年度 修士論文

「修養」から「教育」へ
～早大アメリカ遠征と「科学的野球」～

From “self-discipline” to “education”
～The first tour of Waseda University Baseball Club to The United
States and “scientific baseball”～

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5009A032-2

極本 亮

Kiwamoto, Ryo

研究指導教員： 石井 昌幸 准教授

「修養」から「教育」へ
～早大アメリカ遠征と「科学的野球」～

目次

序章

第1節	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2節	先行研究の検討と本研究の位置づけ・・・・・・・・	1
第3節	本研究の構成と方法・・・・・・・・	2

第1章 一高野球と精神主義

第1節	凜猛なる一高式練習・・・・・・・・	3
第2節	一高野球部の精神・・・・・・・・	5
第3節	精神修養の必要性・・・・・・・・	7

第2章 早稲田大学アメリカ遠征と「科学的野球」

第1節	一高における「科学的」なるもの・・・・・・・・	9
第2節	早稲田大学のアメリカ遠征までの経緯とその注意点・・・・・・・・	11
第3節	アメリカ土産の野球術と帰国後の成績・・・・・・・・	14
第4節	「ハイカラ」批判・・・・・・・・	16
第5節	合理化する野球・・・・・・・・	17
第6節	早稲田にとってのアメリカ人・・・・・・・・	20
第7節	「ハイカラ」からの脱却・・・・・・・・	24

第3章 「科学的」の性質

第1節	「科学萬能」の時代・・・・・・・・	29
第2節	日本と西洋と「科学」・・・・・・・・	34
第3節	「修養」から「教育」へ・・・・・・・・	37

終章

第1節	本研究のまとめ・・・・・・・・	40
-----	-----------------	----

引用・参考文献一覧・・・・・・・・	42
-------------------	----

序章

第1節 はじめに

1905（明治 38）年、早稲田大学野球部は、わが国で初めてアメリカに遠征した。早稲田はアメリカで学んだバント戦術や連係プレーなど、さまざまな新しい方法を持ち帰った。それらはやがて、「科学的野球」と総称されることとなる。そしてこの「科学的野球」はおそらく、日本においてスポーツに科学という言葉がもちいられた、最も早い例であると思われる。

しかし当時、わが国における「科学」の概念は、こんにちのそれと同じものではなかった。明治時代における「科学」とは、定まった概念を持たなかったがゆえに、その個人の考えに大きく左右され、非常に多様であった。「科学」の概念をめぐる明治時代は、いわば「科学」という「イメージ」をめぐる時代であったといえる。

このような時代において、野球と科学はいかにして結びつくにいたったのであろうか。本研究ではこの「科学的野球」が名付けられた経緯に着目する。その結果、「科学的野球」とはどのようなものであるのかということが明らかになると思う。それは、大正時代に入って起こる「野球の大衆化」を読み解く一つの考察になるであろう。

第2節 先行研究の検討と本研究の位置づけ

明治末の野球科学についての先行研究として坂上康博の『にっぽん野球の系譜学』、日下裕弘の『日本スポーツ文化の源流』が挙げられる。

まず坂上康博の『にっぽん野球の系譜学』の第4章「武士道による野球の擁護」では、早稲田大学のアメリカ遠征選手であった橋戸信による『最近野球術』という書籍を中心に科学的野球について言及している。坂上はこの『最近野球術』の序文と付録に掲載された押川春浪の「最近野球に序す」と安部磯雄による「野球の三徳」を根拠に科学的野球には武士道的、あるいは国粋主義的な側面が強いことを指摘しているⁱ。

また、日下裕弘の『日本スポーツ文化の源流』の第3節「スポーツ技術と練習形態」では技術や練習に焦点を当て、科学的野球を説明している。まず明治15年から20年代までの一高を中心とした練習や技術の細かく検討し、早稲田大学のアメリカ遠征後それら練習や技術がどのように変化したのかを明らかにしている。さらにこの書では、欧米先進国の技術、練習方法を「科学的」なるものとして受け取っていたと位置づけているⁱⁱ。

しかしながら、坂上の論文では、武士道的あるいは、国粋主義的な側面があることは明らかになっているが、ではなぜそのような側面があるにも関わらず、「科学的野球」と総称されたのかという説明はなされていない。また日下は、欧米先進国の技術、練習方法を「科学的」なるものとして受け取っていたとしているが、それには「科学」が「西洋」と密接に関わっていることが前提となる。しかし、早稲田のアメリカ遠征が行われた明治末には「科学」は、もはや

「西洋」からある程度切り離された一つの「道具」として扱われていたのである。このことについては本論で明らかになると思う。

そこで本研究では、野球がどのように「科学的」と言われるようになったのかという経緯に着目する。その上で、その経緯をより明確にするために、早稲田の遠征前の日本野球界の覇者であった一高を比較対象とする。また当時の「科学」とはどのような位置づけであったのかを参考にしうえて、「科学的野球」とはどのようなものであるかを明らかにする。

第3節 本研究の構成と方法

第1章では、早稲田大学遠征前の野球界をリードしてきた第一高等学校野球部における野球とはどのようなものであったかを明らかにする。その上で、一高野球部の目的のきっかけとなったインブリー事件と明治30年から訪れる不振の時期にふれ、その「獐猛なる一高式練習」とは、どのような理由から形成されたものであるかを検討していく。

また一高野球部員自身が野球とはどのようなものであるかを当時一高校友会によって出版されていた「校友会雑誌」の号外「野球部史」を使って明らかにしうえて、一高の学生に求められたものはどのようなものであったのかを検討していく。

第2章では、早稲田大学野球部設立からアメリカ遠征後までの経緯をたどっていくなかで、一高野球部と早稲田野球部の違いを明らかにしていく。また遠征後に遠征メンバーであった橋戸信によって出版された『最近野球術』がどのような状況で出版されたのか、また彼ら自身がアメリカ人に対してどのような思いを抱いていたのかを明らかにすることで、「科学的」という言葉を使った背景が明らかになるであろう。

第3章では、まず朝日新聞、読売新聞を使って、「科学的」という言葉がどのような分野において使用されていたかを分析し、当時の「科学的」という言葉はどのような位置づけにあったのかを検討する。さらに、日露戦争後の国内を漂う大きな流れをつかんだ上で、「科学的野球」とはどのような意味を持つものであるかを明らかにする。

終章では、各章で明らかになったことから、「科学的野球」とはどのようなものであったのかを明らかにする。

ⁱ 坂上康博、『につぼん野球の系譜学』、青弓社、2001年、109-115頁

ⁱⁱ 日下裕弘、『日本スポーツ文化の源流：成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究 その形態および特性を中心に』、不昧堂出版、1996年、88-95頁

第1章 一高野球と精神主義

1902（明治 35）年、早稲田大学に野球部が設立されたとき、日本野球界のトップに君臨していたのは旧制第一高等中学校（以下、一高）であった。この一高野球部、すなわち「一高ベースボール会」が設立されたのは、1886（明治 19）年のことであった。当時、「新橋アスレチック倶楽部」（以下、新橋倶楽部）が国内で無敵を誇っており、一高を始め、駒沢農学校や東京英和学校など、都下の多くの学校が挑戦を挑んだが、ことごとく敗退していた。新橋倶楽部はアメリカボストンに留学し、鉄道技術を学んでいた平岡熙が、1876（明治 9）年に帰国し、その勤務先である工部省の新橋鉄道局の鉄道関係者や外国人技師などを集めて設立されたチームであった。しかしながら、新橋倶楽部は 1887（明治 20）年、平岡の退社に伴い、チームも解散する事となり、頂点を失った都下のベースボールチームは、新たな頂点を巡ってしのぎを削る時代へと移っていったのだが、ここで頭角を現したのが「一高」であったⁱⁱⁱ。

1880 年代以前のベースボールは、それ以後のものと比べるといくらか牧歌的であった。しかし、完全に「楽しみ」として存在していたわけではなかった。それは、日本にはスポーツに値するものがなく、体を動かすことといえば、武道の諸芸と決まっていたからである。ベースボールも例外ではなく、武道同様、高い精神性に裏付けられていた。このベースボールにおける精神性を 1880 年代以後、一高がさらに高めていったのである^{iv}。

それから 1904（明治 37）年に早稲田大学に敗れるまでの間、日本野球会の頂点に立ち続けた一高野球部であったが、その野球には独特の「精神主義」が根ざしていた。

第1節 獐猛なる一高式練習

一高野球部には「獐猛なる一高式練習」^vといったものがあつた。それは呼んで字の如く、痛かろうが辛かろうが関係なく実施され、一高野球部の象徴として行われるものであつた。一高野球部がこのような練習を行うにいたる経緯には、2つの象徴的な出来事があつた。その一つが、いわゆる「インブリー事件」である。この事件は、1890（明治 23）年 5 月 17 日に明治学院中等部の白金倶楽部を迎え入れ、向ヶ岡で対戦したときに起こつた。明治学院のアメリカ人講師であるインブリーが、グラウンドを取り囲む生け垣を越えて侵入したことに激怒した一中（一高の旧名）の学生たちが乱闘騒ぎを起こし、両者に怪我人がでたために、無効試合になったというものであつた。インブリーが越えた生け垣は、「禁制の垣」^{vi}と呼ばれるもので、一高生たちにとって「越えてはならない垣」とされていたのである。もともとこの試合では、明治学院が 6 回までで 6 対 0 でリードしており、観戦に訪れた一高生たちのなかには苛立ちがつのっていた。そのような状況でアメリカ人が「禁制の垣」をまたいで入ってきたことが、乱闘騒ぎの引き金

となったのだった^{vii}。

この事件は、国内のみならず国外の新聞でも取り上げられるなど、大きな反響を巻き起こしたが、結局一高側がインブリー本人と明治学院、その他関係者などに謝罪し、インブリーもこれを不問にふすことで事態は収束した。一高の『野球部史』には、この事件について次のように書かれている^{viii}。

「この敗軍以後のベースボール会は、球を弄するが為にあらずして鬱勃たる一片の気を球に托して外に表示するの其れとなれり。しかして校友は大挙して是が後援となり、ベースボールはすでに校技に進み、我が校風はベースボールを借りて其奇風を吐かんとせるの時なりしを以て我が部の覚悟は曩日の比にあらず。従ってその責任また重きを致し、練習頗る獐猛を極めたり（以下略）」

この事件によって得た教訓を礎に獐猛なる練習を行った一中が、半年後に明治学院 26 対 2 で大勝をおさめた^{ix}。かくして、一中のベースボールは単なる「球を弄する」ものから「校風」を表す「校技」へとなったのである。

インブリー事件をきっかけに始まった「獐猛なる一高式練習」をさらに加速させる出来事となったのが、1897（明治 30）年に訪れる不振の時期であった。1897（明治 29）年、一高の名投手であった青井鉞男を中心に横浜の外人アマチュアチーム（Yokohama Cricket and Athletic Club 以下、横浜外人チーム）と対戦することとなった。当時横浜外人チームは、日本人の体格は小さく技術も稚拙であるとしてその対戦を拒否していたが、結果 29 対 4 と一高の勝利に終わったのである^x。この試合は記録上初めて日本人チームが外国人チームに勝利した国際試合であり、一高の名声をさらに高めることとなった^{xi}。

しかし、この青井が明治 1897（明治 30）に卒業したことをきっかけに一高は、不振の時期を迎えるのであった。まず 1897（明治 30）郁文館中学に 18 対 19 で敗北を喫し、郁文館と本郷地区の選手からなる西片倶楽部にも 5 対 6 で敗北する。さらに、郁文館との再戦でも 25 対 26 と惜敗した。翌年の 1898（明治 31）年は、郁文館にも勝利し、負け試合はなかったものの、続く 1899（明治 32）年には郁文館、二高、青山学院に敗北を喫した^{xii}。

この時期の一高投手は守山恒太郎であったが、上記の連敗をきっかけに「死の練習」とも言うべき猛練習を行うのであった。守山はコントロールを良くするために昼夜問わず、一人投球練習を行い、母校の名誉のために投げ続けたのである。疲労により腕が伸びなくなれば、桜の木にぶら下がり腕を伸ばし、投げる。また曲がれば伸ばしを繰り返し、しまいには「煉瓦の壁に大きな穴^{xiii}」が空いたと言う。守山だけでなく、その他の選手も同様の猛練習を行った。練習は素手、空脛、素足で行われ、雨の日も雪の日も関係なく行われた。さらに、「痛い」という言葉の代わりに「痒い」と言え、指先や体から血が出ても容赦なく練習を行い続けよ。これが、「獐猛なる一高式練習」であった^{xiv}。

上記の二つの出来事をきっかけとして、野球は「校風」を表す「校技」となり、「獐猛なる一

高式練習」によって支えられていることは理解出来たが、次節では1903（明治36）年に「校友会雑誌」の号外として出版された「野球部史」（第2号）を使って、より明確に一高野球部の精神を明らかにしていきたい。

第2節 一高野球部の精神

1903（明治36）年に一高野球部は「校友会雑誌」の号外として「野球部史」を出版した^{xv}。この部史のなかの「我部の抱懐」という章のなかに野球部員達の主張が集約されている。ここに一高野球部の精神が色濃く見られる。「野球部史」はこう主張する。

野球はもはや「ただ活発愉快なる運動術」ではなく、「之を内にして精神の修養を勉め、之を外にしては我校風を天下に発表するの具」となり、「内外相呼応して第一高等学校の校風を愈完美ならしめん」とするものである^{xvi}。

「撃剣柔術」のようなものは、「無念無想、不動不屈の武士的精神を養う」目的を持っているものである。一方野球は「技巧の妙」を理解し、「猛球魔球を学ぶ」ものであり、また西洋の球技であるから精神の修養にはならないと言われているが、果たしてそうであろうか。野球の利を理解しているものに聞いてみると、(a) 判断を明確敏活にすることができる。(b) 「頭脳を明爽快明」にすることができる。(c) 「身体を強健」にすることができる。(d) 「共同の風」にすることができる。などである^{xvii}。

さらに、これに飽き足らず「質素儉約の風」、「剛健勇武の気」、「直往邁進の概」を我が部では目的とする。我が部は「校風発揚の大任」を負って、「自治寮は精神を修養するところ」である。この2つを以てその美をなす。よって我が部では「精神修養」を目的とするのである^{xviii}。と主張する。ここに、一高野球部のその目的がはっきりと提示された。

また、対外試合は「運動術を進歩」させ、「青年の気象を鼓舞」しようとするならば「対外試合に若くものなし」とし、一高は「校友の元気の噴火山」であり、「対外試合はその鬱勃とした元気を爆発させる噴火口」であると位置づけている。いかに一高といえども、「撃磨佛拭」しなければその輝きを保つ事は出来ないのであって、「その撃磨、その佛拭」は我が部の「責任」であり、「天職」である。そして、「禮儀（礼儀）」は我が部の「最も重んずるところ」とであると宣言する。ここに一高流の礼儀を見て取れる。つまり、野球は「正々とした姿、堂々とした儀」で行うものであり、勝負とはいえ、心は「光風名酒々落々」としなければならない。それは、「勇を持って戦い、禮を持って制す」という一高の面目に由来するものであると言うのである^{xix}。

また、練習に関しては「責任」という言葉を用いて一高式練習の意義を主張する^{xx}。

「天下廣しと言えど、恐らくはかかる苦しきトレーニングはあらざる可し。これ何の故ぞ、曰く責任こ

れ。某選手予に語りて曰く、飽ける時は南濱を思ふて奮起し、怠れる時は責任に感じて相いましむと、これある哉。誠に此特異なる一高的修養は燦然たる戦勝史の因をなすものなり。」

ここでの「責任」とは、まさに「校風発揚の大任」なのである。しかしながら、上に見た「獐猛なる一高式練習」をなぜ行う必要があったのだろうか。「大任」は、「獐猛なる一高式練習」とどのようにつながるのであろうか。ここで重要になるのが「インブリー事件」なのである。明治学院との事実上の敗戦、また乱闘の騒ぎは著しく一高の名を汚すものであったことは先に述べた。この敗戦を機に一高は「獐猛なる練習」を行い、勝利を重ねていくのであるが、このプロセスこそ「校風発揚の大任」の「責任」が「獐猛なる一高式練習」とつながる答えとなる。つまり、インブリー事件によって汚された一高の校風は、その後の「獐猛なる一高式練習」による勝利によって汚名返上したのである。「責任」という言葉を使ったのは、インブリー事件による汚名に対する「責任」であるとともに、その汚名を返上するという意味での「責任」でもあるのだ。それが結果として「校風発揚の大任」の「責任」となったのである。

それでは、一高野球部における「責任」とは、誰に対する責任であったのだろうか。ここで重要になるのが、一高の「籠城主義」、「自治共同」という考え方である。籠城主義とは、俗世間から隔絶した世界を作るというもので、一高自体を一つの世界と見なし、そこで起こるあらゆることは学生によって行い、また決定することを指す。つまりそれは「自治共同」を意味するのである。なぜ彼等は、「自治共同」しなければならなかったのか。それは、一高生がまさにエリートだったからである^{xxi}。次世代の国家を担う学生にとって、「自治共同」はいわば、国を担う立場にたったときのための予行練習であったのである。つまり、ここでの「責任」とは、自分たちに向けられた「責任」であったのである。失われた自分達の名誉を回復する事が彼等の「責任」だったのである。

このような「自治共同」の考え方は、いたるところに見られ、例えば、先輩と校友と選手を「三位三躰」ではなく、「三位一躰の一本槍」であり、「選手がバットを揮て奮闘するとき、其前に真摯なる先輩あり、其後に一千の校友あり」^{xxii}と表現しているところをみても、教員は登場せず、あくまで「自治」なのである。

第3節 精神修養の必要性

一高野球部の目的が「精神修養」にあったことは『野球部史』からも明らかであるが、ここでは、なぜ「精神修養」が必要であったのかを検討していきたい。

まず、1899（明治32）年1月に「校友会雑誌」に掲載された鶴沢総明による「学生と精神修養」では、修養の必要性を以下のように述べている^{xxiii}。

鶴沢によれば、「学生」は「国家の下に国家のために存在する」ものであるから、「国家を永遠に存在せしめる」ために、「国家に依りて保護せらるる各個人」は「精神修養」しなくてはならないとしている。しかし、鶴沢は「精神修養として補助的に武育を取るを可と信ず」として、「武育を以てわが謂う所の精神教育をも尽せりといふこと能わず」と主張する。その理由としては、「国民の体格を養成」する点においては「国家の分子としての臣民の精神修養に裨益少なからず」であるが、「武育一點張」であると「暴に墮る」からとしている。鶴沢は、武育は体格の養成のためにあるとしているが、このような意見に対して、運動各部は「武」の精神修養に多くの意味付けを行ったのである。鶴沢の言う精神修養がいかなるものであるにせよ、精神修養の必要性について鶴沢のような意見が少なからずあったことは確かであろう。

では次に1906（明治39）年に雑誌「太陽」に掲載された小山正武の「戦後国民自覚修養の要義」を見てみようと思う^{xxiv}。

小山は「修養」を「民族の特性の健全発達」と位置づけ、「多大な資料、即ち世界各方面より併発せる所の活思想を集めて善く之を撰み之を善く咀嚼し、之を善く同化せしめ以て自己民族の智能と為らしめ活精力と為らしむるの謂にして、即ち其民族をして其精神的にも、其肢體的にも共に健全純良にして以て能く世界に独立闊歩せしむべき品性氣風の彌よ発達すること」として、決して「排他的自負誇張の謂」や「保守的偏隘頑固の謂」ではないと主張する。

上記二つの主張で共通していることは、「国家」と結びついて述べられていることである。少なくとも、一高における精神修養は「国家」と密接に関わっているのである。それは、彼ら一高の学生がエリートであり、次世代の国家を担う学生であると認識され、また認識していることから当然と言えるであろう^{xxv}。

つまり、一高野球部は野球を行う目的を「精神修養」とした背景には「国家」との密接な関わりから来る「次世代の国家を担う者」としての使命があったのである。言い換えれば、彼らは野球をエリートに必要な「精神修養」の手段として用いたのである。もちろん、彼らは野球そのものを楽しみもしたのであろうが、野球を行う意義を主張する時には、それはあくまで「修養」であり、「校風の発露」であったのである。

-
- iii 菅野真二、『ニッポン野球の青春 武士道野球から興奮の早慶戦へ』、大修館書店、2003 年、2-3 頁
- iv 佐山和夫、『明治五年のプレーボール 初めて日本に野球を伝えた男・ウィルソン』、の本放送協会、2002 年、144-146 頁
- v 菅野、前掲書、15 頁
- vi 君島一郎、『日本野球創世記』、ベースボールマガジン社、1972 年、61-63 頁 この「禁制の垣」は、学校を取り囲む低い生け垣で一高の「籠城主義」の象徴であった。
- vii 「野球部史」、「校友会雑誌」号外、第一高等学校校友会、第 2 号、1903 年、4-5 頁
- viii 同掲書、5 頁
- ix 同掲書、6 頁
- x 「校友会雑誌」号外、付録、第一高等学校校友会、第 58 号、1896 年、4 頁
- xi 同掲書、5 頁
- xii 坂上康博、『につぼん野球の系譜学』、青弓社、2001 年、13 頁
- xiii 中沢不二雄監修 浦岡偉太郎、『野球史』、奈良日新聞社、1955 年、8 頁
- xiv 中沢不二雄監修 浦岡偉太郎、『野球史』、奈良日新聞社、1955 年、7-8 頁
- xv 「校友会雑誌」は教官・寮生の論説、評論、研究論文、エッセイ、詩歌、小説、運動部関係記事、総代会記事等を含み、後に文壇で活躍した著名な筆者も多く含まれ、特にエリートの必読書としての存在であった。
- xvi 「野球部史」、「校友会雑誌」号外、第一高等学校校友会、第 2 号、1903 年、104 頁
- xvii 同掲書、104-105 頁
- xviii 同掲書、104-105 頁
- xix 同掲書、105 頁
- xx 同掲書、106 頁
- xxi 当時、法制上、大学は帝国大学（1897 年から東京帝国大学）ただ一つであり、高等中学（高校）は、全国を 5 区に分け、それぞれに一校ずつと鹿児島、山口に一校ずつの計 7 校が設立されていた。在学者数は 1893 年当時合計 4483 人に過ぎず、まさに国家の中枢を担う一握りのエリートであった。これら 7 校は、帝大への独占的学生供給機関であり、特に一高は入学難度、合格倍率ともにトップであった。さらに、教科課程や学生訓育方針のうえで指導的地位を占めていた。
- xxii 前掲書、「野球部史」、106 頁
- xxiii 鶴澤聡明、「学生と精神修養」、「校友会雑誌」、第一高等学校校友会、第 83 号、1899 年、1-11 頁
- xxiv 小山正武、「戦後國民自覚修養の要義」、「太陽」、博文館、第 12 巻第 5 号、55-59 頁
- xxv 上記の注、18 に示した。

第2章 早稲田大学アメリカ遠征と「科学的野球」

1908（明治41）年7月、この年『野球年報』（第6号）で、早稲田大学野球部選手、田部信秀は、次のように述べている^{xxvi}。

「仰も早稲田が卅七年東都に於ける全勝者となつて渡米したる事蹟は新機一轉の根本的要素である、科学的野球を行はしむるに至つたのは其の産物である」

田部のこの「野球に就いて」という記事で、早稲田のアメリカ遠征を日本野球会における「新機一轉の根本的要素」とし、その産物として「科学的野球」が行われるようになったことを挙げている。

この文章は、おそらく我が国において「科学的野球」という言葉が用いられた最も早い例である。遠征の約3年後にその総称として使われるようになった「科学的野球」という言葉は、主としてアメリカ遠征に加わった早稲田関係者によって、日本の野球界に広く流通するようになっていった。しかしながら、帰国後すぐにこの「科学的野球」が日本野球会の「新機一轉の根本的要素」となることはなかった。

本章では、早稲田大学野球部設立からアメリカ遠征後までの経緯をたどっていくなかで、一高野球部と早稲田野球部の違いを明らかにしていく。また遠征後に遠征メンバーであった橋戸信によって出版された『最近野球術』がどのような状況で出版されたのか、また彼ら自身がアメリカ人に対してどのような思いを抱いていたのかを明らかにし、「科学的」という言葉を使った背景を明らかにしようと思う。その上で早稲田遠征前にも、一高において「科学的」なるものが存在していたことを示したいと思う。

第1節 一高における「科学的」なるもの

早稲田大学の遠征から約9年前の1896（明治29）年10月、一高の「校友会雑誌」に野球部員による以下のような文章が掲載された^{xxvii}。

「疑もなく彼の一小挫折は我が野球部の一刺撃剤をなして實に技術の一大革新を促したりしなり其改良の重なる點とは、一、「ベース、マン」手袋を用ゆるにいたりしこと。二、科学的打方（サイエンチフィックス、バツチング）を用ゆるにいたりしこと」

「彼の一小挫折」とは、横浜外人チームとの第4戦で大敗したことを指している。先に触れたとおり、初戦は29対4と大勝、続く2戦3戦も勝利をおさめた一高に対して、横浜外人チームは第4戦で当時横浜に停泊中であったオリンピア号の海兵5人を助っ人に呼び、試合に臨んだ。この試合が行われた7月4日がアメリカの独立記念日であったことも、横浜外人チームを本気にさせた。助っ人海兵の一人チャーチ（Church）は、「プロフェッショナル」倶楽部の選手で、一高はこのチャーチに苦しめられた^{xxviii}。後に押川春浪は、『海底軍艦』で「米国軍艦「オリン

ピヤ」号が横浜へやって来て、音に名高き、チャーチの熱球、魔球が我国野球界の覇王ともいう可き第一高等学校の選手を打破った」と述べている^{xxix}。

当時一高の教諭であった山口鋭之助は、1931（昭和6）年5月21日読売新聞朝刊で『「魔球」の語源』という記事で次のように回想している^{xxx}。

「明治二十七八年頃と記憶するが、当時わが球界にナンバー・ワンを誇っていた一高チームが、横浜の外人チームに試合を申込んだ。そして私も誘われるままに横浜までそれを見に行った。何にしる野球の揺籃期であったから、この遠征は全く画期的のもので、試合は素晴らしい応援裡に開始された。所がわが一高軍はどうしたとか、守備には大した失策もでなかったが、打撃は全く振わず、出る打者も出る打者もバツバツと打ちとられて三振に継ぐ三振といった醜態を演じてしまった。選手はもちろん応援の人達もこれには全く言葉なく、哑然として一外人投手の妙技を見守るばかりであったが、この時意気消沈して帰る一団の中から、期せずして「神技だ、魔球だ」という言葉が出た。「魔球」という言葉はこの時初めて生れたのであるが、要するにそれは今日の曲球を指して言ったものである。^{xxxi}」

チャーチが投げた「魔球」は、「今日の曲球」すなわちカーブであった。以後、一高はこの「魔球」を研究し、1904（明治37）年にはエドワード・プリンドル(Edward J. Prindle)の“The Art of Curve Pitching”を抄訳した『魔球術』（美満津商店 1905年）を発行する。

しかし、一高を驚嘆させたものは「魔球」だけではなかった。「一小挫折」によって「技術の一大革新を促したりし」ものが、「科学的打方（サイエンチフィック、バツチング）」であった。では、この「科学的打方」とは、どのようなものであったのだろうか。この点について「校友会雑誌」では次のように述べている^{xxxi}。

「彼は（チャーチ）六月二十七日の役（第三戦）我が校に微行し来りて必ずや我が選手の癖疾を察し以て彼等の打方に一大改良を加えしなり、彼れは其通の黒人丈けに炯眼早く其乗すべきの方法を案出せり乃ち有名なる「サイエンチフィック、バツチング」を用いる初めたるなり^{xxxi}」

ここでは、「我が選手の癖疾を察し以て彼等の打方に一大改良を加え」ること。すなわち、相手の投手の癖を見抜いて打ち方を変えることが、「サイエンチフィック、バツチング」の中身であった。もう一つの一大革新「ベース、マン」手袋の使用については、キャッチャー以外の塁手もグラブ（正しくはミット）を用いるようになったということである。これ以前、一高では、キャッチャー以外は素手、素足で行われていたのであるが、これ以後、そのようなことはなくなった。

このように、すでに1896（明治29）年までには、少なくとも打撃に関して「科学的」という形容が用いられるようになっていた。しかし、それが野球全般に用いられるようなことはなかったし、「投手の癖を読み取る」といった程度の意味しか持っていなかった。投球技術ではカーブがやっと導入されるようになり、用具の面ではキャッチャー以外の塁手も「手袋」を用いる

ようにはなってきたが、そこでの手袋とはミットであり、グラブというようなものではなかった^{xxxiv}。一高にとって「技術」とは二義的なものであり、あくまで「精神修養」が第一義だったのである。「癡猛なる一高式練習」によって培われた精神こそが勝因でなければならなかったのであり、技術や科学はあくまで補足的なものでなければならなかったのである。

第2節 早稲田大学のアメリカ遠征までの経緯とその注意点

一高に遅れること15年の1901（明治34）年、早稲田大学の前身である東京専門学校にも「チアフル倶楽部」という野球倶楽部が出来た。しかし、当初のメンバーは1チーム組めるかどうかというもので、中学生相手に毎回10点差以上で負けるという状態であった。グラウンドも十分でなく、学内でもその存在はほとんど知られていなかったという^{xxxv}。しかし、東京専門学校が早稲田大学と改称される1902（明治35）年になって、早稲田野球部は大きく前進することになる。この年、教授の安部磯雄が初代野球部長に就任し^{xxxvi}、のちのアメリカ遠征の主力メンバーである橋戸信、押川清、泉谷祐勝らが入学してきた^{xxxvii}。

早稲田のアメリカ遠征は、野球部創設時にはすでに計画されていたという^{xxxviii}。安部は、合宿のミーティングや「野球部集会」の際に、日本球界で覇権を握ったらアメリカへ連れて行くとししばしば口にし、選手を鼓舞していた^{xxxix}。安部の言葉に、選手は半信半疑であったものの、1904（明治37）年5月27日の学習院戦を皮切りに、早稲田大学アメリカ遠征は現実味を帯びてくる。早稲田対学習院の試合は四谷仲町の学習院のグラウンドで行われ、14対7で早稲田が勝利を収めた。さらに、同年の6月1日には当時の王者である一高と弥生ヶ丘で対戦した。試合はシーソーゲームとなったが、5回に一挙4点を挙げた早稲田が、結局9対6で一高を破った^{xl}。続く6月4日には、慶應義塾運動場において慶應と対戦し、早稲田の後半の猛攻により13対7で早稲田が勝利を収めた。7月2日、早稲田は横浜外人チームとも対戦し、28対3の大差で勝利した。10月30日に初めて早稲田の戸塚グラウンドにおいて慶應と再び試合を行った。1回に3点を奪われたものの後半に反撃し、結局12対8で慶應に連勝した^{xli}。

こうして早稲田大学野球部は、日本野球界での覇権を握ったが、実際にアメリカ遠征を行うためには費用の面で問題があった。時代は日露戦争の真っ最中であったため、早稲田大学当局は費用の捻出は不可能であるとした。しかし、安部の大隈への直訴により問題は解決されることとなる。大隈は安部の直訴に対して以下のような発言をした^{xlii}。

「国のためになるなら、どんな困難をおかしてもやりなさい。（中略）学生には学生のなすべき道がある。いくさをやるものはほかにいる。学生が見聞を広めるために外国へいくのに、なんのさしつかえがあろうか」

結局、大隈が大学から5千円を調達し、さらに渡航費、滞在費の自己負担を条件に、試合の入

場料の 3 分の 2 を早稲田が受け取るという申し出をスタンフォード大学が受け入れてくれたことにより工面されることとなった。遠征の親書はカリフォルニア大学にも送られたのだが、返事は返ってこなかった^{xliii}。こうして、早稲田大学のアメリカ遠征は 1905（明治 38）年 4 月 4 日に実現されることとなった。

いよいよ実現する事となったアメリカ遠征を前に、安部と大隈は学生にどのようなことを求め、また注意したのかを、雑誌『中学世界』に見てみたい。安部はアメリカへ行くにあたっての心構えを次のように述べている^{xliiv}。

「最も大切にすべき所の事は、異なる境遇に己が身を處して行く其心得でございます、若しむづかしき言葉で言へば、貧に處しては其心乱さず、富に居ては驕らぬと云ふような心得が肝要であらうかと思います。諺にも謂う通り『郷に入つては郷に従へ』と云う、是は必ずしも、無主義、無定見と云ふことではない。吾々の主義は一步も枉げることは出来ませぬけれども、外形上に現れる風俗の事や、座作進退の事に至りては、其の時々の風に従つて行くと云ふのが、先づ普通の事であり、吾々の世に處して行く所の最良法であるかと考えます。（中略）米国に行けば努めて米国の風に倣い、日本学生の素朴なる風を脱して、幾分か風采も優美であると云ふやうな風にならねばならぬと云ふことを申して置きました、」

また学生を紹介する為に大隈宅に出向いた時に以下の様な会話を交わしている。

「其時大隈さんが学生に向かつて言はるるには、洋行したならば必ず英語を上手に話すようやうにならなければならぬ。今一つは諸君は十分ハイカラーにならなければならぬと申されました、是は實に良い忠告でありまして、私が学生に望んだのも全く之に他ならなかつたのであります。」

一般的には「バンカラ（蛮カラ）」なイメージでとらえられることの多い早稲田大学であるが、このとき大隈は学生たちに「十分ハイカラーに」なることを求めている。周知の通り、もともとバンカラとは、明治期に「ハイカラ」に対するアンチテーゼとして生まれた言葉であつた。あえてぼろぼろの学生服や学帽、高下駄やマントを着用し、腰には手ぬぐいをぶら下げるといった服装に象徴されるこのスタイルは、本来は一高を中心とした旧制高等学校の生徒が発祥とされている。それは、表面の姿形に惑わされることなく、心理を追求するということを表現したものであつた。しかし、実際早稲田のなかにも、そのようなタイプの学生は多くおり、野球部出身のちに大衆小説家となる押川春浪は、その典型であろう^{xlv}。

このような学生たちに、安部と大隈はアメリカ遠征にあたって「ハイカラ」となることを求めた。すでに安部は、遠征前から「ハイカラ教育」を行っており、例えば、頭髮に関しては、当時多くの選手たちがそうであつた坊主は、アメリカでは「囚人の頭」とであるとして禁止していた。さらに、常に女性を優先することや、毎朝髭を剃り、無精髭を生やさぬ事。スープを音を立てずに飲む事。人前で爪楊枝を使用しないことなど、非常に細かい生活作法の指導が行われたのであつた。

またこの「ハイカラ教育」は、精神面にも及んだ。安部は、海外文学の文学的傑作を読むこ

とが重要であるとして、テニスの『イノック・アーデン』の講義を行った。『イノック・アーデン』は、テニス 55 歳のときに作られた物語詩で、船乗りイノック・アーデンが妻子のために一山宛てようと航海に出たものの、遭難して孤島に流され、十数年の歳月を経てようやく故郷に帰ってきたら、妻はイノックとも親友だった幼なじみと再婚して幸せに暮らしていた、という悲しい水夫の物語である。遠征に先立ってどうしてこの書を選んだのかはわからないが、いずれにせよ洋書を読むということを皆に要求したのである。さらに、橋戸にはシェークスピアの講義に出席するようにとも言っていたという^{xlvi}。

しかし、安部の「ハイカラ教育」は、遠征参加者たちをそのまま「ハイカラ」な人間にしようと考えていたものではなかった。安部は次のように述べている^{xlvi}。

「吾々が帰朝する時になつて、早稲田の学生は僅か二三ヶ月洋行をして居つて、あれ程にハイカラーになつて仕舞つたかと批評をせらるるやうな事があつては、誠に詰まらぬ事と私は考えて居りました。勿論人の批評などはどうでも宜いことでありますけれども、外形上ハイカラーであることは即ち精神上にもハイカラーであることを示すのでありますから、此點は十分に注意せねばならぬ所と私は考えたのであります。」

安部の「ハイカラ教育」は、「郷に入つては郷に従へと云う教訓を心得て」いるがゆえに行われたものであり、「日本へ帰つたならば、全く米国の生活を忘れて、又元の下宿生活に立ち返ると云う所の覚悟を今日から為さねばならぬ」のであった。

以上のような安部による「ハイカラ」教育を受けて、早稲田野球部はアメリカ遠征に向かったのであるが、ここまでの経緯を見て、一高の野球部と早稲田野球部との一つの大きな違いが見て取れる。それは、安部という部長の存在である。一高野球部が学生による「自治」を強調していたのに対して、早稲田野球部はその初期から部長である安部の思想を色濃く反映したものであった。

この安部の思想は、野球部の目的にまで大きな影響を与えた。アメリカ遠征のメンバーである泉谷祐勝は、後年の座談会において以下のように述べている^{xlvi}。

「安部先生が野球に力を入れられた原因は、先生が欧州を廻って帰られる時、アメリカとイギリス両国のボートレースと陸上競技の対抗試合を御覧になり、平和外交にはスポーツが一番良いと考えられたのです。扨て日本が外国とスポーツで対抗出来るのは、ボートは駄目、柔剣道は相手がなく、テニスもまだその域に達していない。するとどうしても野球以外にないと考えられた。日本で一番強い野球を作らねばならぬと考えられた。」

後に、安部本人も野球部を創設しようと思ったのは、英国に滞在した 1894（明治 27）年であったと述べていることから、野球を平和外交の一つとして考えたのであろう^{xlix}。このような目的を部員である泉谷が知っていることから、その目的さえ安部により規定されていたことが伺える。

キリスト教社会主義社であった安部は、貧困解決や平和外交に強い関心を持っていた。そして、多くのキリスト教社会主義者がそうであったように、安部もまた、こうした社会改良において体育を重視したのであった¹。

また、早稲田大学の創設者である大隈も、野球について次のように述べている^{li}。

「学生の一競技が多少でも両国間（日本と米国）の平和の為に力ありとすれば蓋し一の野球競技も大なりと云ふべし。我輩は大に盛んに運動競技を為し対校試合のみならず屢々国際的競技を為して青年の元気を養ひ健康にて活気ある国民を養成する事又実に教育として適当なる方法と信ずる。」

こうして野球を平和外交に役立て、さらに精神修養にも役立てようと考えた安部と大隈の二者のもとに、数名の学生が集まり、早稲田野球部はアメリカへと向かうのであった。

アメリカでの対戦成績は 26 試合行って 7 勝 19 敗であったが、投手が河野安通志一人で 26 試合を投げきったことから、当然の結果、いやむしろ上出来であったと言うべきであろう。後に『早稲田大学野球部百年史』のなかで、「スタンフォード大学 1 回戦の如き、思うさま敵の詭計におちいってほん弄された。以後我が遠征軍は、大に悟る所あり、まったく勝敗を離れてひたすら彼等の長所を学ばんことに勉めた^{lii}」とあるように、勝敗よりも技術を学ぶことに集中したのであった。

第 3 節 アメリカ土産の野球術と帰国後の成績

本章の冒頭で見たように、1908（明治 41）年 7 月、早稲田大学の選手田部信秀は、『野球年報』のなかで早稲田のアメリカ遠征を日本野球界における「新機一轉の根本的要素」として、その産物として「科学的野球」が行われるようになったことをあげた。じっさいそれは、技術、用具、戦術のいずれにおいても、その後の野球界に大きな革命をもたらすものであった。このとき早稲田が持ち帰ったものについて、『早稲田大学野球部百年史』は以下のようにまとめている^{liii}。

1 グラブ

従前内外野共ミットを用いしを、捕手一塁手以外のグラブを用いた。

2 スパイク

脚絆足袋の旧時代去りてスパイク靴を使用する事となる。

3 練習法

従来の練習法なるものは殆ど一定の型を成さなかった。早大帰朝後全く面目一新し、打撃練習、投球練習等の後年の秩序ある練習法を教えた。

ウォームアップ、キャッチボールの行わるるや、投球の最初から力限り投合い、ウォームアップを知らなかった。

4 二塁手と SS の連携

走者の牽制 以前は二塁に走者ある場合、二塁手は塁上にあつて走者を引きつける法なりしを、此の時より二塁手も普通の位置を取り、遊撃手と呼応して走者を牽制する所法を伝えた。

二塁の刺殺 此れ以前、一塁より二塁への走者を刺す場合、捕手よりの球はすべて二塁手が扱いたるを遊撃手も此れに参与する事となる。

5 スクイズ

スクイズプレー 従来此のプレー如きは何人も知らざりしを、渡米軍が習得し帰りて早慶戦に用いて成功し、其れより広く行わる。当時これをバントエンドランと称す。

6 バント

バントの運用 渡米前もバントをブントと呼び時にこれを行うものがあつたが、正式の方法を知らなかつた。渡米軍の土産中大いなるものの一つである。

7 投球法

スローボール、スピリットボール等が河野によりて紹介された。殊にチェンジ・オブ・ペースの効力を知つたのも此の時である。

ボディースィング（ウィンド・アップ）が紹介された事は投球の外形上最も人々を驚かした。此のボディースィングは河野が明治 38 年秋早慶戦に使用する以前、同人のコーチによつて修得した水戸中学の投手大井斉に依つて明治 38 年月 7 日、慶応普通部対同中学試合（慶応綱町運動場に於て）に使用され、観球児すべての怪奇の目を以てこれを迎えたのであつた。

8 スライディング

滑込みも此の後大に行われるようになった。すべて手よりするもので、後のフックスライドは、明治 42 年以降に紹介されたものである。

9 その他

- (1) 共同作戦の研究
- (2) バットを大きく振り回さず、プッシュして打つこと。打撃の合理化。
- (3) ヒット・エンド・ランの活用。
- (4) 捕手が四球目の球を隠して、油断した一塁走者を刺殺するプレー。
- (5) シングル・ハンド・キャッチ。
- (6) 肩のコンディションを保つ為に、毛糸のシャツで肩を包むこと。
- (7) 団体的応援法
- (8) 三回の試合で勝負を決すること。

上記のようなアメリカ流の野球術を学んだ帰国後第一戦は、当然のことながら日本国内でいに注目の的となり、試合が行われた早稲田グラウンドには多くの学生が試合観戦に訪れた。

それは、アメリカから帰って来た早稲田がどのような野球を行うのであろうかと言う期待に他ならなかったのであるが、この試合はその期待を裏切るものであった。試合は学習院三島投手の活躍により 8 回までで 3 対 2 と学習院のリードであった。早稲田は来る慶應との一戦までアメリカ流の野球術は披露しないつもりであったのだが、ここへきてアメリカで学んだ「バント」策に転じ、結果一挙 4 点を奪い、なんとか学習院に勝利したのであった。この早稲田は、アメリカ遠征のため 6 月末の学年試験を誰も受けておらず、帰国後その追試験に迫られたのである^{liv}。練習が行えるようになったのは 10 月に入ってからであった。覇者であるおごりもあったであろう。

続く 10 月 28 日に行われた対慶應三戦勝負（三戦で勝敗を決める方式）の第一戦は野球における「関ヶ原」と雑誌新聞が書き立てる程の注目を浴びた一戦であった。しかし、始まってみると終止慶應ペースで、慶應投手桜井の好投に早稲田は沈黙し、結果 5 対 0 で早稲田の惨敗であった^{lv}。

11 月 8 日に行われた対慶應第二戦は慶應が勝った時点で勝者が決まると言う大一番であった。早稲田はその名誉を守るため、死物狂いで練習を行い試合に臨んだ。両軍の投手の好投により、試合は 8 回終わって両者無得点であったが、9 回に早稲田はなんとか 1 点をもぎ取り試合終了。早稲田は雪辱を果たした。しかし、実力の均衡は目に見える程であり、アメリカ土産の野球術に対する評価は劇的に挙ることはなかった^{lvilvii}。

早稲田対慶應の最終決戦は 11 月 12 日に早稲田のグラウンドで行われた。この試合の勝者が実質上野球界の覇者となるべき試合であったため、両軍によるまさに「関ヶ原の戦い」であった。実力はより均衡し、試合は 9 回終わって 1 対 1 の対ゲームであったが、両者の意思により勝負が決するまで行われることとなった。11 回に早稲田は 2 点を納め、その裏慶應も 1 点を返すが、結局早稲田の勝利に終わった^{lviii}。

第 4 節 ハイカラ批判

このように、帰国直後の 4 試合は、早稲田がアメリカからの技術を見せつけて圧勝するという事態は起こらなかった。それどころか、なんとか勝ったといった程度のものであった。期待を裏切られた観客たちは、「渡米の効なく、ただハイカラの模倣にとまるのみ^{lix}」「洋行帰りがなんだい^{lx}」などと不平をもらしたという。アメリカから持ち帰った服装や用具も、揶揄の対象にこそなれ、賞賛されることはなかったらしい。それまで早稲田は胸に「W」の黒文字だけが入ったユニフォームを着用していたのだが、渡米前に新調した「WASEDA」のエビ茶の文字が胸に刻まれたユニフォームを新調し、帰国後もそれを来ていた。またモクタール^{lxi}やワセリンを塗って真っ黒になったクロブを着用し、エビ茶の二本ラインが入った帽子や米国製のスパイク、試合前に着用した真っ赤なオーバーセーターなど国内ではみられないものであった。このような

早稲田の服装について観衆は「おや、おや、えらくハイカラになったぜ」と口々につぶやいたようである^{lxii}。

早稲田の試合ぶりには、新聞の論調にも批判的なものが目立った。例えば、『東京朝日新聞』の「野球短評」では対慶應第1戦の敗因として以下のように評した^{lxiii}。

「(一) 年来の基礎を僅々の日時に得たる米国風を以て破壊し尽したる事 (二) 虚栄の夢に眩惑せられて敵を軽侮したる事 (三) 泉谷、橋戸、河野、山脇四人が試合を引き受け他五選手を度外に措きたる事」

ここでは、長年かけて培った基礎が短期間の遠征で身につけた「米国風」によって失われたこと、敵を見下したこと、一部の選手が独走したことがその原因だと言うのであるが、この指摘がどの程度正当なものであったかは不明である。

また、学習院との試合は、「米国流野球と日本流野球との試合」と位置づけられ、結果、アメリカから持ち帰ったバント策で早稲田が勝利を収めたにもかかわらず、「院方は運拙し」と技術ではなく運であった報じた。肝心であるその技術については触れさえもしなかった^{lxiv}。

第5節 合理化する野球

観客や新聞から「ハイカラの模倣」、「年来の基礎を破壊した米国風」と酷評された帰国後の早稲田野球とは、具体的にどのようなものだったのであろうか。おそらく、技術的な面において、それを象徴するものと人々に映ったのは、投球法と、ウォーミングアップ、バント戦術、などであったと思われる。

a. 投球法について

投球について注目されたのは当然のことながら早稲田の投手である河野安通志であった。彼はアメリカでその投球法を会得し、学習院との対戦からその投球法を披露した。従来までの投球法は端的に述べると「振りかぶらない投方」いわゆるノーワインドアップ投法であったのだが、河野は「振りかぶった投方」つまりワインドアップ投法を行ったのである。これが「科学的野球」でいうところのボディースイング（ウィンド・アップ）であった。このような投球法は当時画期的であり、特に観客にとっては斬新であった。雑誌、新聞、観客はこの投球法を「舞踏的投方^{lxv}」、「アメリカダンス^{lxvi}」、「ダンス投方（ダンシングスロー）^{lxvii}」、と称した。

まずこの「舞踏的投方」とは、鹿鳴館という外国からの賓客や外交官を接待するために明治政府によって建てられた社交場で行われた舞踏会から来ていると思われる。当時の急激な西欧化に対する日本人の複雑な感情が投影されていたこの言葉を振って使用された言葉であった。

b. ウォーミングアップ

試合、練習に臨むにあたってのウォーミングアップは、遠征後大きくその姿を変えたものの一つである。従来までは守備中心の練習を行い、また投球については初めから力一杯投げると

いうことを行っていた。しかし、早稲田は、まず軽く肩ならしをし、その後打撃練習に移った。つまり、攻撃中心の練習に変わったのである。さらに、内外野手も捕球すると素早く二塁、三塁そして本塁へと球を回し、二塁手と遊撃手が代わる代わる二塁をカバーするなど、従来までののんびりした返球ではなく、連係プレーの確認を行った^{lxviii}。

c. バント戦術

バント戦術は「米国風」の技術の代表とされる物であった。じっさい、帰国第 1 戦で終盤まで学習院にリードされていた早稲田が逆転に成功したのは、このバント戦術のおかげであった。早稲田の遠征以前にもバントは知られていたが、それは「ブント」と呼ばれ、それほど重視されていなかった。安部本人も、遠征以前はバントを「卑怯」な方法であると考えていたらしい。遠征前、遠征メンバーの泉谷はその俊足を生かしてよくバントを行っていた。しかし、安部は泉谷に「バントは卑怯であるからやめたまえ」と叱られたと述べている^{lxix}。ところが、帰国して 2 年ほどして安部が出版した野球の入門書『野球案内』で、安部は、次のように述べている^{lxx}。

「球を打つにも二種類ある。一は強く打つので、一は軽くバット（棒）を球に当てるので、これをバントと称して居る。此バントといふのが恐るべき利器であるから、今日の野球手は誰でもこれを学んで置かねばならぬ。（中略）元来バントといふものは犠牲といふことを目的とするのだから、打手は死んでも、味方の走者をして一塁を進ましむれば善いのである。（中略）若し其バントが非常に巧妙であれば自分も安全に一塁を占領することになるのである。故に、バントを安全なる犠牲球と称するのは適当であらうと思ふ。」
[下線筆者]

遠征前の安部の目には「卑怯」と映ったバントは、帰国後の彼にとって「誰でもこれを学んで置かねばならぬ」「恐るべき利器」となっていた。じっさい、アメリカ遠征後の安部は「巧み」さを野球に不可欠のものと考えようになっていた。帰国直後の 1905（明治 38）年 5 月 9 日から同年 7 月 8 日まで東京朝日新聞計 20 回にわたり掲載されたこの記事は、恐らく早稲田大学のアメリカ遠征について書かれた初めの文章であろう。内容は早稲田大学の創設期の話からハワイにおける労働問題など多岐にわたるが、この記事の中でアメリカにおいて学んだ技術を次のように表現している^{lxxi}。

「野球の勝敗が主として投手の技量に存することは人々の知る所であるが、米国に於ける野球の発達主として投手の技量の発達にあるのだ。彼等は単に大なるカーブを投ずるのみならず、球の速力も驚くべき程早い。（中略）実際当米国の野球に接触しなければ幾年待つて居ても我日本の野球界に進歩を見ることは出来ないと思うのである。（中略）今一つはベースランニングである。此點に於いても米国人の方が足の長いだけ得意であるとは言うまでもないが、単に速力ばかりでなくよく機会を見てベースを盗むに巧みなることは、また大いに余等の学ぶべき所である。（中略）日本における野球の練習は将来主として打方と云うことに在らねばならぬ。しかして之を練習するには巧妙なる投手の養成を主としなければならぬ。」[下線筆者]

安部は、「巧み」であること、そして「巧妙なる投手の養成」することの必要性を説いているのであるが、一高野球と比較してみるとその違いは明らかであろう。先にも述べた通り、一高の野球はいわば「非合理的」なものであった。しかしこの「非合理的」であるからこそ、「獰猛なる一高式練習」はその意義があったのであるが、一方早稲田は「合理的」であることを求めたのである。そのことがより明確に分かる理解するには、肩に関する注意点について述べられた文章を見てみようと思う^{lxxii}。

「第一に投手は肩の苦痛を感じずる時は十分に休養せねばならぬ。或時代には痛いのを我慢して投げ居る中には漸次肩が強くなつて最後にはイクラ投げて痛まぬ様になると云う事を云うて居た事もありましたが、実に馬鹿馬鹿しい話であつて、そんな事のあるべき筈はなく、此のごときは全く天命に背く徒の遣り方であります。されば投手は初め微痛を感じて直ぐ善くなるが如き時は格別として、どうも痛んでかなぬと云う様な時には決して練習をしてはならぬ、除ろに其苦痛の去るのを待つて大にやるべしだ。米国の商売人の投手ですら肩を大切に結果、一週間に精々二回位しか投手の役を勉めぬのである。」

[下線筆者]

この文章は、早稲田選手の橋戸信によって書かれた物である。ここでは、「痛いのを我慢して投げ」ていると「漸次肩が強くなつて最後にはイクラ投げて痛まぬ様になる」というようなことは「実に馬鹿馬鹿しい話」としている。他にも、野球部員によって1907（明治40）年出版された『ベースボール』においては、次のように述べられている^{lxxiii}。

「此れまでの習慣では投手は一日に二百なら二百の球を力一杯、肩の痛いのも我慢して投げよと云ふのであるが、そんなことをすると結局には肩が悪くなつて了ふ。若し肩が痛くなつたら、弱い球を数少なく投げるが可い。全然練習を廢すと云ふことは、非常な場合の外避けねばならんが、然ればとて痛いのを我慢して投げるのは、如何なる方面から考えて見ても、非科学的たるを免れない。宜しく相当の休息と治療とを興へるべきである。併し痛いのを我慢して投げたとて、全然肩が滅却して了ふと云うことは無い。或る程度まで発達することはするが、其れは極めて不自然な発達で、何處かに欠陥があつて、自由的に発達した肩の円満なるには到底及ばないのである。（中略）つまり一方は早く出来る丈に間に合わせ的で、一方は大成するまでに多少長い時間を要する丈に、自然的で永続的で、且つ科学的なのである。」[下線筆者]

安部は野球を自ら行ったことはなく、それ故に、選手の精神面における教育に指導の重きを置いていた。ここでいう精神面とは、野球による精神教育というより、遠征まえに行った「ハイカラ」教育のようないわゆる「社会人」としての教育を指すのだが、その安部も肩に関して以下のような見解を示している^{lxxiv}。

「今日まで我国にて行はれたる方法は肩が痛んでも無理に我慢して練習をすることであつた。恰も義太夫をやる者が其咽喉をつぶすまで稽古するが如く、我慢さへすれば肩も益強くなるものと考へた。然しこれは全く亂暴なる練習法である。米国人の肩の強いのは決して自然に因るものではなくて、全く養生が行届いて居る結果である。先づ練習後には肩を冷やさぬ様に注意せねばならぬ。若し痛を感じずる場合には其痛

の去るまで練習を休まねばならぬ。此位に注意すれば肩は益発達して、強球を投ずることも難くはない。」

早稲田にとって一高のような「肩が痛んでも無理に我慢して練習をする」ことは、「実に馬鹿馬鹿しい」ものであり、「亂暴なる練習法」であるとして、「自然的で永続的で、且つ科学的」であることを求めたのであった。つまり、バント戦術や肩に関することからも明らかなように早稲田は合理的に勝つことをも重要視したのであった。それは、早稲田が、勝利によって日本野球会の覇権を握ったからであり、ここでも一高と明確な差が生まれたのであった。一高も結果として勝利によって名声を得たのであるが、その矛先はいつも「獐猛なる一高式練習」にむけられていた。一方早稲田はそのまさに「勝利」によって名声を得たのである。しかし、かくいう早稲田も勝利至上主義ではなかった。一高と同じく野球に精神修養も求めたのであった。その典型が、安部のバントについての見解であろう。安部はバントに「自己犠牲」という意味付けを行ったのである。言い換えれば、合理的な戦術に新たな「精神修養」を付け加えたのである。なぜその必要があったのか。それは押川春浪が橋戸の『最近野球術』の序文で述べた次の文章によく現れている^{lxxv}。

「特に思う、日本は武の国也、古来武を以て国を建つ、今日柔弱なる似非文明の風ふきさぶとも、焉んぞ建国の精神を没却すべけんや。文明の産物は利用すべし、之に心酔すべからず、彼のハイカラを以て徒らに文明人の表章と為し、練武鍛勇の業を野蛮の遺風と嗤うが如き輩は、之れ泰西人の似非文明を買はんが為めに、日本建国の精神を売る者也、日本人の特色を泥中に抛つ者也。世界に比無き日本武士道は、一面に於ては精神修養の産物也、一面に於ては練武鍛勇の産物也。（中略）武を練つて而して体力を鍛え、体力を鍛えて而して精神を修養す、之れに智力を加へば、天下又何者をか恐れん、日本武士道の由来する処茲に在り。徒らに練武鍛勇の業を嗤ふは、日本武士道の由来を嗤う所以と知らずや。」

押川は「練武鍛勇の業」あつての「智力」であると主張する。押川がここで言う「智力」とは、「合理的な考え」をさしている^{lxxvi}。つまり、合理的な戦術も「練武鍛勇の業」を行わずしてすれば、「ハイカラ」のような「日本建国の精神を売る者也、日本人の特色を泥中に抛つ者」となってしまうと言ったのである。押川のように野球に「武」的なものを求める考え方は、一高のみならず早稲田においても依然として根強かったのである。

では、アメリカから持ち帰った物が「ハイカラ」であると批判されたことについて彼らはどのように感じたのであろうか。そのことを理解するためには、早稲田がアメリカ人をどのように見ていたかを知る必要があるだろう。

第6節 早稲田にとってのアメリカ人

帰国後すぐの1905（明治38）8月、雑誌『中学世界』で安部の「早稲田大学の野球選手」という記事が掲載された。この記事のなかで安部は次のように述べる^{lxxvii}。

「私は米国の青年学生の気風や、其生活の情態などを見まして、多く吾々の及ぶことの出来ない點を見たのでございます。勿論前にも述べた通りに、吾々学生が彼の地に於て非常に長所を発揮した所もござい
ますけれども、概して言えば中々吾々の品性は米国の学生の品性には及びがたいかと思ひます。私は或時
学生に向かつて斯様に申したことがございます。ベースボールの技術如きは、吾々が二三年も奮発すれば
遂には彼等に優る程になることが出来るかも知れぬが、彼の米国学生の麗しき気風に至つては、十年や二
十年では中々真似が出来まいと思う。」[下線筆者]

ここで安部は、「吾々の品性は米国の学生の品性には及びがたい」と言う。「ベースボールの技
術如き」は、数年で追い越すことが可能かもしれないが、「米国学生の麗しき気風」は、10年や
20年では真似出来ないと言うのである。なぜ安部がここまで言うに至つたのか。それは、『中学
世界』の同じ号に載せた橋戸による「米国の学生と運動競技」を見ることで明らかになると思
う^{lxxviii}。

「其他各大学の選手中で、大分懇意になつた人があります、彼等はゲーム中こそ、全く敵味方の感があ
りますが、それが終れば打解けた實に愛らしい友達となるのです、私共の中でも、大分面白い朋友を得て、
盛んに通信をして居る人もある位です。凡て米人が吾人に比して、競技上の偏見を持たぬと云ふ事は、此
一事を以ても分かる事だと思ひます。其私共が彼等によりて受けた親情と云ふものは、實に数えきれぬ程
です」

橋戸によれば、選手のみでなく観客までもが「寛大の精神」をもって日本から来た選手を迎
え入れてくれたようである。ここに彼らは「ゲーム中こそ、全く敵味方の感」があるが、試合
が「終われば打解けた實に愛らしい友達となる」という、いわばスポーツマンシップをみたの
である。さらにこう続ける。

「米人が持つて居る寛大の精神は、到底負けず嫌いの国民が、想像する事が出来ぬ程であると云う事は、
彼等が競技を見る態度に、善く現れて居ると思ひます、今回私共の一行が米国にありて、前後廿六回の試
合を致しましたが、至る所に米人は、御世辞よく私共を、好遇して呉れたのです、彼等の頭には、丸で日
本チームを負かしてやればよいと云ふ考えはなく、却つてどうか日本の小供等が、勝つて呉ればよいと
云う、希望のみがあつた様に、見受けられた位です、それですから見物人の文句が頗る面白い、私共が少
し甘い事をやる時は、口を揃へて東郷とか、大山とか云ひ「序にモスコーまで行け」とか「セントピータ
ースブルグに進め」などと云ふて、奨励して呉れました、若しか失敗する時は「東郷心配するな」などと
真面目に怒鳴り立てるのです。若し審判官が、少し不公平な事をやると、見物はなかなか承知しません、
「審判官やめろ」とか「露探」などと云ふ聲も聞こえた事があります、時としては私共の方へ、幾分か肩
を持つ審判官がある時は、見物人は何とも云ひません、私共は此の如き好意の中で試合をしたのですから、
一寸も異境にある心地がしなかつた位でした。」

ここで、その好意的な態度は、アメリカであることを忘れさせるものであったと述べている。
このことは、まさに橋戸にとって驚きの出来事であったことが読み取れる。つまり、アメリカ

での試合は当然アメリカ人はアメリカを応援するものであろうという橋戸の常識が覆されたからこそ、彼は「異境にある心地」がしなかったのである。読み取り方によっては、橋戸は遠征前にはアメリカに対して多少なりとも敵対心を持っていたのかもしれない。しかし、橋戸はここにアメリカの「寛大の精神」を見たのである。また橋戸にとってこのようなホスピタリティは、アメリカ人の「国民性」とも見えたようである。さらに彼は、一介の少年にさえ、そのような心性が宿っていることに驚きを隠さない。

「最も天真爛漫に、其国民の性行を表すべき小供等が、一般に無邪気にして、一向にひねくれた愛国心を持たず、時としては私供の仲間に入つて来て、熱心に奨励する様は、實に可愛らしいものでした、現に一行がシヤトル市のワシントンホテルと云ふ、同市では一番景色の善い宿屋に泊まつて居る頃、同宿せる二人の兄弟と仲善くなりました、此兄弟の小供等はマックスウエルと云ふ、ポーランドの豪家の子弟でありまして、兄は十二、弟は漸く八歳位にしかありませんが、所謂米国氣質丸出しの方で、頗る愛想よく、話のうまい小供等でした、丁度同市のタウンチームたる、レニヤ倶楽部と試合する朝、其小供等は、私の室に來り、私共のバットウグローブを監督する役目をするからどうか一緒に連れて行つて呉れと云ふのです、勿論私共と一緒に行けば入場料は要らないですから、頗る徳用には違ひない、併し私は如何にも可愛い小供ですから、早速承知して連れて行きましたが、其兄の方は年の多い丈け、善く私供の為に働いて呉れました、其時は河野が肩を痛めた為、私が代わりて投手をやりましたが、其小供は絶えず私の傍へ来て、どうだ腕は痛くないか、今日は屹度勝てるからシツカリやれ、などと御世辞を云ふて居りました、所が愈々九回を終わり、二対一にて愉快なる勝利は、吾人の手に歸した時其小供は直ちに走り來たりて私の手にすがり、グツドボーイ々と、さも嬉しさうに喜ぶのです、其時は見物臺からも、澤山の紳士が下りて来て、代わる代わる私共に握手をなし、口を揃へてうまくやつたと云う事を賞賛しました、私共は實にこんな嬉しい事は、又と無い程に感じざるを得なかつた。」

また新聞を中心とするマスコミも彼らを冷評することなく、暖かく迎え入れたようである。この背景には恐らく二つの背景がある。一つは、アメリカにおいてホスピタリティという考えが浸透していたこと。もう一つは恐らく政治的なものであった。時は日露戦争中である。大国アメリカといえども、日本の国民感情を無駄に煽り、むやみに敵対心を作るということはしなかったはずである。マスコミの対応は実は非常に政治的なものではあったが、早稲田にとってそれは政治的ではなく、驚きであったのだ。

「殊に感心に思ふたのは、新聞紙の記者が私共に対して一の冷評を試みず、偶々大敗をなしても、一向に頭からケナスと云ふ事をせずに、私共の有する何等かの長所を掲げ、長々しく敗跡を記載せざるに反し、若し私共が勝つたりと云ふたら、筆を揃へて其詳細を書き立て、ポンチ畫などを盛んに挿入するのです。」

もちろん、「米人が持つて居る寛大の精神」、冗談を交えて来客に声援を送り、あえて相手チームに有利となるような判定すら好むような態度は、自らの優位を確信するがゆえの余裕であっただろう。その意味では、相手を見下した放漫さの裏返しと取れなくもない。しかし、少な

くとも、このとき安部や橋戸にとって、そのような態度は「麗しき気風」と映り、「品性」と映ったのだった。そしてその「寛大さ」、「度量」が、まさしくアメリカ人のタフネスの証であると映ったのだった。

橋戸はひるがえって、「我国民」が、そのような「寛大さ」、「度量」を見せることが出来るであろうかと自問している。

「今假りに支那や朝鮮の野球選手が日本に来て各学校に挑戦し、早稲田や慶應などと試合をする時、我国民は嘗て米人が吾人に対して示したるが如き度量を現し、又マックスウエルの如き小供があつて、彼等を鼓舞し、遠来の客をして心から喜ばしめる事であらうか、又各新聞の記事は、等しく彼等をして落胆せしめず、顰眉せしめぬ様に、勉むるべきか、私共は頗る疑問に耐えぬのであります。」

橋戸にとって、アメリカ人たちがそのホスピタリティのなかで示した「寛大」と「度量」は、「負けず嫌いの国民」が、「想像する事が出来ぬ程」のものであった。そしてそのことが、日本的な欧米への対抗意識を「ひねくれた愛国心」と感じさせたのであった。このような感覚は、遠征に加わったメンバーの多くにも共有されていたと思われる。なぜなら、帰国 2 年後に早稲田大学野球部によって出版された『ベースボール』の序文では、野球を学校の運動へ推薦するという以下のような文章が書かれているからである^{1xxix}。

「野球は米国の国民的競技で、謂はば我国に於ける相撲の如きものである。従つて芝居其他のものとは異なり、高尚なる紳士の遊戯として、品位を重んずる紳士淑女も争つて其の競技を見物し、非常な社会的勢力を持つて居るのである。運動としての野球が、如何に多くの特色を有し、如何に多くの利益を興ふるかは、敢て予の言を持たざる所であるが、前にも云った如く、野球は高尚なる紳士の競技であるから、単に之を学校の運動として考ふるも、体格の養成は勿論、品性の陶冶に興ふる利益も此の遊戯に優るものは無いのである。競技者の気質を順良にし、精神を快活にするは云ふまでもなく、明敏にして冷静なる頭脳と、剛堅にして不屈なる意気とを養ふと共に、また不知不識の間に同心協力的美徳をさへ養はしむるのである。であるから、此の遊戯は殊に学校の運動としては絶好なもので大に指導奨励せられねばならぬものである。」[下線筆者]

ここで、野球が「紳士の遊戯」と書かれていることには、一定の含意を読み取ってよいのではないだろうか。彼らは、アメリカ人の「麗しき気風」を「紳士の」という言葉に表現したのである。

ここまでのアメリカ遠征で得たアメリカ人に対する認識を理解した上で、彼らの持ち帰った野球術が「ハイカラ」と批判されたことをここで検討しようと思う。少なくとも彼らにとってアメリカ流は単なる模倣にとどまらなかったことは容易に推測できる。彼らはその先に「麗しき気風」を見ていたのである。帰国後すぐに雑誌『中学世界』に橋戸と安部のアメリカ人に関する記事が掲載されたのは、彼らが単なる模倣として「ハイカラ」と批判されることのないように試合に先立って示されたものであった。しかし、結果として「ハイカラ」と批判されるこ

ととなったのである。安部の遠征前の注意点で指摘されていたことが、まさに現実のものとなってしまうのである。このような状況「ハイカラ」批判の最中出版されたのが橋戸による『最近野球術』なのである。

第7節 「ハイカラ」からの脱却

1905（明治36）年11月に橋戸によって記された『最近野球術』は、安部の勧めにより出版された。この書は、初めて野球技術を「科学的」に説明したものであり、本文で幾度も「科学的」という言葉が用いられている。橋戸自身はこの「科学的」という言葉を大きく分けて二つの使い方をしている^{1xxx}。

①合理的という意味における「科学的」

「又初心の人にありては、グラブを球の来る方向に添うて引かずして、寧ろ押し出すが如くにして、捕うる者あり。こは勿論科学的にあらず、球勢に反して捕ふると、其勢を殺きて取るとにては、大した違なり。」（146頁）〔下線筆者〕

「打方の練習は、単にゴロを打ち、大飛球を打つに止まると云うは、大なる誤解なり。勿論徹頭徹尾、此の如き練習法は、不可なりと云うにはあらず、唯一流の打者たらんとするには、甚迂闊なり、科学的にあらずと云うのみ。」（149頁）〔下線筆者〕

「以上は米国に於いて主に行はれつつある、ラインアップとなす。併し時としては、順次強打手より弱打手に及ぼす方法もあるべし、或は又強弱交互に錯綜する法もあらん。併し最も科学的にして、且つ有効なるものとして、余は特に以上記するが如き、方法を勧むるなり。」（167頁）〔下線筆者〕

上記で使用されている「科学的」はいずれも「合理的」と置き換えてなんら支障がない。そればかりか今日に置いては「合理的」と置き換えた方が読み取りやすい。しかしながら使用されている言葉は圧倒的に「科学的」という言葉の方が多く使用されている。

②「科学的打撃法（科学的バッティング）」

「米国の野球界にありては、所謂科学的バッティングなるものの行われ、一塁に走者ある時、ノーアウト又はワンアウトなれば、打者は必ず本塁より一塁に至る線上に向ふてバントをなし、自己は一塁に死するも、走者をして容易く、第二塁を奪うの、計策を執るなり。又は走者第三塁にある時、ノーアウト又はワンアウトならば、同じく一塁の方向へ、バントの来る機会極めて多し。その如き場合にありては、一塁手は少しく内野線の内側に入りて、この種のヒットに備うる事必要なり。」（83頁）〔下線筆者〕

「之れ最近米国の野球界が、行いつつある陣法にして、全く科学的打撃法、即ちバントヒット、或は犠牲球の発達は、従来の守備法を、一変せしむるに至れるなり。」（95頁）〔下線筆者〕

上記はほんの一例であり、本文中には上記のような「科学的打撃法」や「科学的」という言葉が幾度となく表記されている。

この書には先に述べた押川春浪による「練武鍛勇の業」に関する序文と安部による「野球の三徳」が掲載されていた。早稲田の帰国後の4戦が圧勝出来なかったことをきっかけに、早稲田は「ハイカラ」であるとして批判されたことは先に述べた。そのような状況で出版されたこの『最近野球術』は「科学的」であることを強調したのであった。この書をきっかけに早稲田は「ハイカラ」から脱却するのである。この「ハイカラ」からの脱却をバントという戦術から読み解いていく。上記したように、選手である橋戸はバントを「科学的打撃法」と称した。一方、安部はこの書に寄せた「野球の三徳」の「仁」で次のように述べる^{lxxxi}。

「身を殺して仁を為すといふことが最も美はしき道徳であるとすれば野球も亦吾人に仁を教ゆるものと言ふべきである。野球は九人を以て組織せねばならぬから所謂協同遊戯である。凡そ協同生活にせよ協同事業にせよ苟くも他人と協同せんとする者は各幾分か自己の意志を曲げるといふことがなくてはならぬ。若し各我意を貫かんとすれば協同てふことは忽ち破壊せらるるのである。(中略) 兎に角野球遊戯は吾人に協同一致の必要なることを教へ我意を棄つべきことを要求するのである。遊戯其れ自身も吾人に自己を殺して他人を生かすべきことを教ゆる。サックリフアイス、ヒットなるものは正しくこれである。野球遊戯の目的は團體に勝利を得せしめさへすれば自己が死ぬのは少しも悲しむべきことではない。(中略) 故に米国などでは、一番バッターがとに角一塁まで進めば、二番バッターは屹度バントを試みて、味方を二塁に送る事をするのである。(中略) 野球に於ては自分だけ功名をすれば善いとか自分だけがホームに生還すれば善いとかいふ様なことを考へてはならぬ。却つて人の為に自分は犠牲に供し以て全局の勝利を占むることが手柄となるのである。」[下線筆者]

つまり、バントは「科学的打撃法」であり、「仁」なのである。ここに、「科学」に「精神修養」が加わったのである。早稲田が「ハイカラ」と批判されたのは、実力が伴っていなくておらず、観客や新聞には単なる「模倣」として映ったからである。しかし、橋戸は「アメリカ流」を「科学的」と称し、安部はその科学に「仁」という自己犠牲の美德を加えたことによって、単なる「模倣」から「精神修養」へと読み替えていったのである。一高における精神修養が非合理的なものであるからこそ、その意義を持つものであったのに対して、早稲田は合理的な精神修養というものを掲げたのである。

このような読み替えは野球の三徳である「勇」、「智」にも現れた。例えば、早稲田が帰国後の試合のウォーミングアップで、内外野手も捕球すると素早く二塁、三塁そして本塁へと球を回し、二塁手と遊撃手が代わる代わる二塁をカバーするなど、従来までののんびりした返球ではなく、連係プレーの確認を行ったことは先に述べた。これに安部は「智」をつけたのである^{lxxxii}。

「野球家に要する第一の資格は敏捷ということである。然し敏捷ということを単に身體の敏捷といふだけに解してはいけない。勿論身體も敏捷でなくてはならぬ。(中略) 米国に於て屢々野球の巧手を指して

彼はヘッドの人であるということを聞いた。これは即ち心の敏捷に働く人だということを意味して居るのである。野球の如きも或程度までは腕の働きで上達する事が出来るが、其以上は全く心の働き即ち脳の作用であることは人々の一般に認めて居る所である。(中略) 心の作用というのは要するに注意と判断力である。自己の持場に充分なる注意を興ふべきは勿論であるが若し自己の處に球が来たならば如何にすべきか豫め考えて置かねばならぬことは前にも陳べたる通りである。(中略) 此咄嗟の場合には實に敏速なる心の作用を要する。これが即ち判断力である。而して此判断力の養成ていふことは學問に於ても等しく必要であるのみならず。實は學問のよく出来る程の明晰なる頭腦を有して居るものは必ず運動家として成功するに相違ない。」[下線筆者]

つまり、素早い返球やプレーは判断力と注意力が必要で、それは「學問に於ても等しく必要」と主張し、「學問のよく出来る程の明晰なる頭腦を有して居るものは必ず運動家として成功する」というのである。ここに安部の思いがよく現れている。野球は勉強ができないものとするのではなく、學問的な要素つまり判断力と注意力を要する教育的価値のあるものなのである。だから、勉強ができるものは、野球も出来るのだと主張した。この時代學問に打ち込む学生の運動離れが進んでいたことへの危惧であろう。これは裏を返せば、野球が出来るものは勉強もできるという学生へのメッセージであったかもしれない。事実、安部は「學問に鈍き者」が「第一の運動家になれる筈がない」と述べている^{lxxxiii}。遠征後、安部の野球への思いは、もはや早稲田野球部のためのみならず、日本野球界へと変わっていったのである。1907 年に出版された『野球案内』では、「野球が広く我國民に愛好せらるるに至れば著者の希望は達せられたのである。」と述べていた^{lxxxiv}。この『最近野球術』を出版させたのも、日本の野球普及を思つてのことであつた。

さらに、練習が打撃中心に移つたことに関しては「勇」をつけた^{lxxxv}。

「バッティングに成功すると否とは全く勇氣の有ると否とに依りて定まるものである。米國に於ては選手を定むるにバッティングの成績を標準とするそふだ。亦平常の練習に於てバッターが足を後方に引く癖があればこれを直す為に右足を杭に結び附けるそふだ。此結果であろうか。米國の野球家にして足を後方に引く様なものは殆どないと言ふてもよい。然しこれには大分の勇氣を要する。何分球に打たれば負傷せずとも激痛を感ずる事は勿論であるから誰でも喜んで其矢面に立つ者はいない。然し一々これを避ける様では到底球を打つことは出来ないのであるからバッターは先ず球を恐れぬといふ勇氣を養わなければならぬ。」

日本野球会において、押川の言うような「武」的なものが根強く残っていたからこそ、安部は「野球の三徳」を「科学的野球」に付け加えた。これにより早稲田野球は「ハイカラ」から脱却できたのである。さらにこの「科学的」という言葉が持つ性質も「ハイカラ」からの脱却を大きく促すものとなっていくのである。よつて続く第三章では、この「科学的」が持つ性質について述べていく。

-
- xxvi 田部信秀、「野球に就いて」、「野球年報」6号、野球年報編集部、1908年、200頁
- xxvii 「校友会雑誌」号外、付録、第一高等学校校友会、第59号、1896年、10頁
- xxviii 同掲書、4-10頁
- xxix 押川春浪、『海底軍艦』、桃源社、1970年、12頁
- xxx 山口鋭之助、「魔球」の語源、「読売新聞」、1931年5月21日、朝刊
- xxxi ちなみに山口は明治27、28年頃としているが、これは記憶違いであり、実際に試合が行われたのは明治29年である。
- xxxii 「校友会雑誌」、前掲書、5頁
- xxxiii 1986年の「校友会雑誌」では「サインチフィック、バツティング」となっているが、1903年の「校友会雑誌」に掲載された同じ文では「サイエンチフィック、バツティング」と訂正されているので、本論では後者を使用する。
- xxxiv 高橋雄次郎、『新式ベースボール術』、四海堂、1898年、28-37頁
- xxxv 菅野真二、『ニッポン野球の青春 武士道野球から興奮の早慶戦へ』、大修館書店、2003年、17-19頁
- xxxvi 東京専門学校の「チアフル倶楽部」のときにも、安部は主任としてよく見学に来ていたが、正式に部長として就任するのはこの時からである。
- xxxvii 飛田徳洲、『早稲田大学野球部百年史 上巻』、早稲田大学出版、1981年、81頁
- xxxviii 早稲田スポーツ百周年記念誌編集委員会編、『早稲田スポーツ百周年記念誌』、2000年、5頁
- xxxix 大和球士、『新説 日本野球史 明治篇』、ベースボールマガジン社、1977年、125頁
- xl 翌日の6月2日に慶應大学も一高を破り、一高覇者の時代は終わりを告げ、いわゆる「早慶時代」が幕開けすることとなった。
- xli 木村毅、『都の西北』、ベースボールマガジン社、1978年、100-110年
- xl ii 菅野真二、『ニッポン野球の青春 武士道野球から興奮の早慶戦へ』、大修館書店、2003年、64頁
- xl iii この時期、カリフォルニアにおいて日本人労働者排斥問題が起こっていたため、親書が帰ってこなかったであろう。
- xl iv 安部磯雄、「早稲田大学の野球選手」、「中学世界」、博文館、第8巻第10号、1905年、10頁
- xl v 横田順彌、『熱血児 押川春浪 野球害毒論と新渡戸稲造』、三一書房、1991年、33-39頁
- xl vi 木村毅、『都の西北』、ベースボールマガジン社、1978年、140-143頁
- xl vii 安部、「早稲田大学の野球選手」、11頁
- xl viii 伊丹安広、『野球の父 安部磯雄先生』、1965年、12頁
- xl ix 安部磯雄、「早稲田大学野球選手渡米記」、「朝日新聞」、1905年5月11日
- 1 安部磯雄、『理想の人』、金尾文淵堂、1906年、58-84頁
- li 橋戸信、『野球虎之巻』、運動世界社、1911年、付録3頁
- li i 飛田徳洲、『早稲田大学野球部百年史 上巻』、早稲田大学出版、1981年、90頁
- li ii 同掲書、92-93頁
- li v 菅野、同掲書、96頁
- lv 「朝日新聞」（東京）、1905年10月30日
- lv i 同紙、1905年11月10日
- lv ii なおこの試合は、入り口に「拍手の外一切の野次的行為を禁ず」、「如何なる場合と雖もボールに手を触れるべからず」の二か条が掲示され、野次馬連の騒動を未然に防ぐ配慮がなされた上で行われた。

-
- lviii 前掲紙、1905 年 11 月 14 日
lix 菅野、前掲書、98 頁
lx 同掲書、104 頁
lxi モクタルとは、アカマツやクロマツなどの木部を原料とした医薬品。
lxii 木村、前掲書、179-180 頁
lxiii 前掲紙、1905 年 10 月 30 日
lxiv 同紙、1905 年 10 月 15 日
lxv 同紙、1905 年 11 月 16 日
lxvi 菅野、前掲書、103 頁
lxvii 富永俊治、『早慶戦百年 激闘と熱狂の記憶』、講談社、2003 年、58 頁
lxviii 木村、前掲書、180 頁
lxix 伊丹、前掲書、14 頁
lxx 安部磯雄、『野球案内』、亀井支店書籍部、1907 年、31 頁
lxxi 前掲紙、1905 年 6 月 21 日
lxxii 橋戸信、「米国の野球界」、「野球年報」4 号、野球年報編集部、1905 年
lxxiii 早稲田大学野球部選手編、「ベースボール」、彩雲閣、1907 年、9 頁
lxxiv 安部磯雄、「余の野球観」、「野球年報」5 号、野球年報編集部、1907 年、93-94 頁
lxxv 橋戸信、『最近野球術』、博文館、1905 年
lxxvi 押川はこの序文で、「十里の道を一時間にて達する汽車」を「文明の産物」とし、その産物と体力が合わされば「更に愉快」としていることから、この「智力」とは、近代的な合理的なものを指しているといえる。
lxxvii 安部磯雄、「早稲田大学の野球選手」、18 頁
lxxviii 橋戸信、「米国の学生と運動競技」、147-149 頁
lxxix 早稲田大学野球部選手編、前掲書、序文
lxxx 橋戸、『最近野球術』、146 頁、149 頁、167 頁、83 頁、95 頁
lxxxi 同掲書、205-207 頁
lxxxii 同掲書、202-203 頁
lxxxiii 飛田、前掲書、52 頁
lxxxiv 安部、『野球案内』、前掲書、3 頁
lxxxv 同掲書、206-207 頁

第3章 「科学的」の性質

第1節 「科学萬能」の時代

1900(明治33)年から1910(明治43)年における当時の「科学的」観念を明らかにするために、朝日新聞と読売新聞における「科学的」という言葉がどのような文脈で使われているかを調査した。(表1・2)

1900(明治33)年から1910(明治43)年における朝日新聞と読売新聞の「科学的」という言葉は、大きく三つとその他の分野で使用されていた。

(1) 化学・物理学・医学に関する「科学的」

この分野における「科学的」は比較的今日と同じような意味において使われていた。朝日新聞においては保護色に関する記事^{lxxxvi}や殺人と自殺のメカニズムに関する記事^{lxxxvii}、また病気に関する治療法などの記事^{lxxxviii}において「科学的」という言葉が使用されていた。大辞泉によると現在における科学的という言葉の意味は1. 考え方や行動のしかたが、論理的、実証的で、系統立っているさま。2. 特に自然科学の方法に合っているさま。とあるが、まさにこの意味においての「科学的」である。

朝日新聞同様、読売新聞においても化学・物理学・医学に関する記事でより多く「科学的」という言葉が使用されていた。笑いのメカニズム^{lxxxix}や病気の治療法に関する記事にその言葉が使用されているのだが、朝日新聞と比較して「非科学的」という言葉を使用している事が特長として挙げられる。朝日新聞は「科学的」であるもののみに焦点を当て、読売新聞は「科学的」であるものと「非科学的」であるものを論証している。しかしながら、手法としては「科学的」なる手法を用いて「非科学的」なものを論証しているのであって、「科学的」という立ち位置に関して違いは見られない。両者の立ち位置に違いは見られないが、「科学的」な手法を用いて「非科学的」なものを論証するという読売新聞の立ち位置の方が、若干現代で言う科学的なる立場をとっていると言えるであろう。

(2) 宗教に関する「科学的」

朝日新聞において宗教という記事の中で使用された「科学的」は上記の(1)における意味として使用されているものが多い。『科学的宗教』^{xc}や『科学的信仰』^{xci}と題する本が出版されるが、内容的には神や仏という不確かな存在を、論理的に説明しようとするものであったつまり化学や物理学などの学問が広まってきた事で、不確かな存在としての神や仏を証明しようという試みが多くなされた結果、宗教という分野でこの「科学的」という言葉が使われたのである。

一方、読売新聞はこれら宗教の分野で「科学的」という言葉は見られないが、催眠術や迷信に関する記事の中で「科学的」という言葉が出てくる。しかし、対象が宗教からオカルト的なものへと変化したにすぎず、不確かな存在への「科学的」挑戦という動機は朝日新聞と根本的

に同様である。

（３）教育に関する「科学的」

明治時代の教育において「科学」は重要なキーワードである。ここでは注目すべき２つの記事を参照する。１つ目は1903（明治36）年10月16日の朝日新聞朝刊に掲載された北星佳人による「明治歴史を渴望す」と題された記事である^{xcii}。

「…明治教育の理想は卑近なる日常生活の用具として、所謂『読み書き』の単純なる目的を達するを得て満足せらるるをなき也。智識の啓発と徳性の錬磨と、これを教育の神経中枢として、国民性の宣揚開展を其大目的となせるにあらざる乎。区々たる教育学説の間に懊悩セルの学者も、種々たる其の体系を辿りて利害得失をきわめんとしつつあるに外ならず。吾人は現下の教育に敢えて間然すべからざるを云はず、而も何の故に憂ふべきかを知らざる也。如何なる弊習学悪も此国民にありては遠きを期せずして、必ず芟除し去らざるべきを信ずれば也。ざるを況んや人の云ふが如き其弊竇も、これを史的考察の下に見来たれば、進歩に伴へる必然の余弊たるにすぎざるをや。蓋し明治教育史の特色なりとせらるる所は、其科学的（智的）教育の発達にあり。彼の時として智慧の子あれども徳行の君子人なきが如くに非難せらるるはこの故也。社会と個人との觀念をめいかくにさらしめたるにあり。彼の大明なくして私照あり、公道なくして私道ありと弾訶せらるるはこの故也。国民生活の一般的拡大を期し、国民智識の普遍的発展を旨としたるにあり。彼の往々にして天才者を迫害し、非凡を凡とし、有能を無能とするが如くに舐罵せらるるはこの故也。然れども物に一長一短あるはこれを如何ともなすべからず。斯る非難の今時にありて、其特長を没して教育の全体に渉れるあるが如く思惟するは、不當の事たらずや。固より吾人亦斯かる非難の偶然にして発せられたるにあらざるを知る。事実に於て一面此種の非難の断じて否定せらるべきにあらざれば也。只云はんとするは、これ未だに徒に罵しらるべく弾訶せらるべきにあらざして、徐に将来の画策経綸に俟たるべきことこれ也。」

二つ目は1906（明治39）年10月8日の朝刊に掲載された海南生による「科学的智識」と題された記事である^{xciii}。

「…科学なるものは由来悉く実験に実験を重ねて得たる確實の学術なれば、之を会得するに於ては其人をして正確且機密の理性を起こさしめ、百般の事物を推考論定するに正常たる方法を執らしむ、故に其人は徒に空想に陥り空論に走るが如き不幸を見ることなかるべし、従って科学的智識なきものが社会に立ちて之を学びたるものと競争せんとするも、そは前者の失敗に帰するべきや疑いなし、人生は常に科学に支配せられ人類は全く科学に圍繞さるるに拘らず、之を理解せずして此間に處せんとするは実に困難の業なり。」

上記の記事から、教育の分野における「科学的」なものは智識（以後「知識」と記す）と密接に関わっていた。さらにそれら科学的知識は知識の啓発と徳性の錬磨に必要な存在であり、国民知識の普遍的拡大を目的としたものであった。これからの社会を作り上げる人材にとって

これら科学的知識は重要な役割を担うものとして理解されていたことがわかる。

同じく読売新聞でも、「科学的精神^{xciv}」や「科学的智識」、「科学教育の普及」などの言葉を並べ、その教育の必要性を説いている。しかし、読売新聞は必要性に加えて現状に対する警鐘的文章をいくつか掲載している。例えば 1910（明治 43）年 1 月 11 日の朝刊で「科学的知識の欠乏」と題した記事の中でこう述べている^{xcv}。

「…世は不景気の形声に充滿すれども、人間の生活に於ける科学力の応用は之れが為に休止せず、漸く文明の爛熟時代に入らんとするを証するものに似たり。これにつけても、我国に於ける一般の科学思想が尚未だ幼稚にして、急激なる電気事業の発達、科学力応用の進歩に伴はざるものありて、ここにもまた我国の文明の跛足的、畸形的なるを嘆せざるべからざるの理由あるを見るべし……無論現代は実に科学萬能の時代なりといえども、其の発達の未だ完しと云うべからざるに於て、人間が一切の迷信、或は不可解より脱する能わざるは当然なれども、我が国民の多数の如く愚にも付かぬ迷信に捕らはれ、方角とか吉凶とかの為に日々日常生活の制肘を受け、知らず知らずのうちに多くの損害を受け居る国民は尠なかるべし。是れ一に科学教育の普及せざるが為に、一般の人心の甚だ幼稚なるに基くを知るべきものにあらずや。」

さらに、1907（明治 40）年 8 月 15 日の朝刊では「お恥しき科学的智識」と題打って朝日新聞が取り上げた「科学的智識」がいかに幼稚であるかを述べ、日本の科学的知識の欠乏を嘆いている^{xcvi}。

上に見た新聞記事からも明らかな様に時代はまさに「科学萬能の時代」だったのである。特に教育という分野においては科学的知識は必要不可欠なものであり、国民に広く普及しなければいけないものであった。しかしながら、その普及は十分ではなかったのである。ここで国民に広く普及されなければいけない科学的知識とは、原克が指摘しているとおり「学会誌や研究論文といった、専門家集団による閉じた知的サークルのなかだけで通用するものではなく、科学知識をひろく一般大衆に伝えることを目的とした情報ツール^{xcvii}」としての科学なのである。このいわゆるポピュラーサイエンスの特徴を原は以下の様に述べている。「それらの特徴は、最先端の知識を正確に押さえることは言うまでもないが、同時に、読者である大衆の受容傾向にたいする配慮がなされているという点である。^{xcviii}」この大衆にとって分かりやすい科学の流行を朝日新聞は「科学萬能の時代」と呼んだのである。

このようなポピュラーサイエンスの流行は早稲田がその総称として「科学的野球」と名付ける一つの大きな要因となったのではないだろうか。早稲田が「科学的野球」と名付けるまでに約 3 年の歳月を要している。この約 3 年の間に「科学萬能の時代」が幕開けるのである。図 3 を見ていただきたい。これは、「科学」をテーマにした書籍数を年別にグラフ化したものである。早稲田の遠征が 1905（明治 38）年でそこから約三年間の間に科学書数は激増する。このような科学書ブームはこの時代においても認識されていた。1908（明治 41）年 8 月の朝日新聞では「流行の出版物」に「科学的の物が歓迎される傾向」があり、「本が割合よく売れるようになった此

傾向は殊に科学書に於て現れている」と述べている^{xcix}。この「科学萬能」の流れに早稲田も便乗したのである。なぜ便乗出来たのか。それはアメリカ流の野球術が前章で示した通り「科学的」ということを強調していたからであり、また最先端のものであったからである。さらに、どうして便乗したのか。それは先にも述べた通り「科学的」知識がこの時代において必要不可欠なものと認識されていたからである。つまり、科学的知識は国民に広く普及されなければならないものと認識されていた。早稲田は野球を国民に広く普及させたいという思いがあったので、必要とされている「科学」に便乗する事により、野球も多くの人にとって必要とされるものとしようとしたのではないだろうか。じっさい、早稲田の遠征あたりから、野球に熱中するあまり、学問をおろそかにする学生が増えてきていた。そのことに対する「野球批判」が徐々にではあるが出てきていた^c。この時代で最も広く必要とされていたのは、「武」的なものより、「科学」だったのである。よって早稲田はこの「科学」という言葉を利用したと考えるのが妥当であろう。

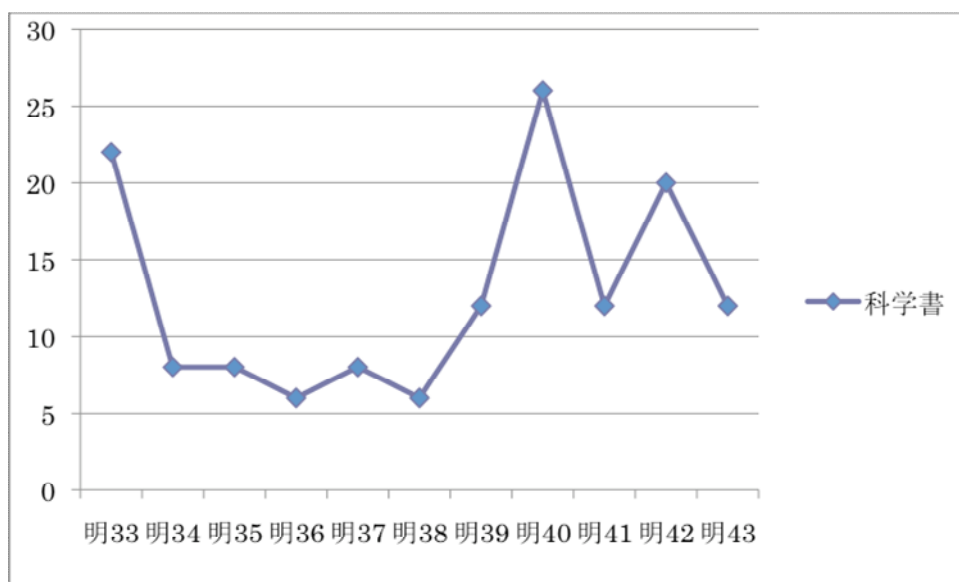


図 3

(国会図書館 一般資料検索「科学」の検索結果数の年別グラフ)^{ci}

(4) その他に関する「科学的」

上記三つの分野意外でも朝日新聞、読売新聞を問わず「科学的」という言葉は使われており、それは恋愛や俳句など一見科学とは無縁のようなものにこそ多く見られた。しかし、1910 (明治 43) 年 12 月 3 日と 4 日に朝日新聞掲載された「俳句の科学的研究に就いて (上・下)」という記事は注目に値する^{cii}。その記事では、「彼等 (西洋) の研究方法を應用して所謂科学的に考察せらるることになったが、なほ其等は比較的多数の人が注意するやうな対象に限られて居て、少数の人々が興味を感ずる如き対象は依然として科学の光の外にある。而して其一つは俳句で

ある」として、「俳句の科学研究は内容と形式との両方面から別々に着手するのが至当である」と定義し、俳句の科学研究は「西洋の学者に紹介するだけでも意味のある仕事」としている。つまり、西洋から輸入された科学を用いて俳句の優れている所を証明し、海外に発信しようと主張している。しかし、注目すべきはこの記事の中に、「科学の西洋からの分離」を見て取れるからである。もともと「科学」とは西洋的なもの、あるいは西洋の学問として認識されていた。しかし、この俳句に関しては、西洋から入ってきた「科学的」アプローチによって、日本文化を証明し海外に発信するといういわば「ツール（道具）」としての「科学」として捉えられていた事が分かる。

まとめると、1900（明治33）年から1910（明治43）年における「科学的」なるものは上記のように分類される。しかしながら朝日新聞の科学的記事を幼稚だと論破する読売新聞の論調を見ても「科学的」観念の模索期にあたるのであろう。また国民に知識の啓発を促す記事が目立った事は、一般の庶民においては何を持って「科学的」とするかは深く浸透していなかったと言える。さらに西洋由来の医学や物理学、化学に対して「科学的」アプローチは必要不可欠なものであったことは必然といえるが、教育の一大目標に「科学的」なるアプローチが必要とされ「知識の啓発と徳性の錬磨」に役に立つと考えていた事は特筆すべき事である。

さらに注目すべきは、宗教やオカルト、恋愛など一見科学とは無縁な様なものに「科学的」という言葉が多く使われたことである。西洋という概念から分離し、独立した存在となった科学は、あらゆるものを公平に語ることが出来るものとして扱われたのである。語る対象がたとえ非常に政治的なものであったとしても、「科学」という言葉を使用する事で「百般の事物を推考論定」出来たのである。宗教やオカルト、恋愛に関してあたかも公平に語ることが出来るようになったのは、「科学」が持ついわば「萬能」性という性質があったからなのである。つまり、この時期における「科学」とは、一つは教育的必須要素をもったものであり、二つ目に従来までは語ることが出来なかった「百般の事物を推考論定する」という「萬能」性を持ったものである。

「科学的」の使用法（朝日新聞）	
化学・物理・医学	14
教育	9
宗教	7
その他	7

「科学的」の使用法（読売新聞）	
化学・物理・医学	11
教育	7
その他	5

（図 1）

（図 2）

第 2 節 日本と西洋と「科学」

日清及び日露戦争は、日本人としての国民意識を変化させる出来事であった。明治維新後の開国により日本は、外国と比較して体格的にはもちろんのこと、知性に関しても劣っているという意識を生みだした。いわゆる「日本人劣等説」である。この「日本人劣等論」を代表する人物の一人である森有礼は、日本人が西洋人に比べて知的レベルが低いことを指摘した上で、漢字を主とする日本の教育制度を合理化すれば、知的レベルは向上すると述べている^{ciii}。また、洋学者であり、のちに儒教に基づく道德論で教育運動に携わった西村茂樹も和漢の文字を廃止し、洋字を用いた有用性を述べるなど、この時期「日本人劣等説」を唱える人物が数多く登場した^{civ}。

しかしながら、日清戦争と日露戦争の過程及びその勝利は「日本人劣等説」を覆し、大国主義を芽生えさせ、逆に「日本人優秀説」をもたらした。また上記したような「日本人劣等説」に基づく西洋崇拝の思想は、この時期厳しく非難されるのであった。

例えば、法曹家桜井熊太郎は『日本人』という書で「ハイカラー亡国論」という記事を載せている。ここで彼は、ハイカラーの連中は「旧慣」を否定し、衣、食、作法から社会組織や遺伝的品性まで改め欧米風にしなければ決して文明レベルに達しないと主張しているが、欧州の富強文明が今日あるのはその国民の自尊心によるところが大きく、欧州の文芸工芸を取るにしても日本人の自尊心の礎上に移すべきであると述べ、さらに、ハイカラーの連中は欧州文明の精神を誤解し、日本人としての自尊心と愛国心を失うにあたっては日本国民の資格がないとまで主張している^{cv}。

ここに挙げた日本人論はごく一例に過ぎず、日清戦争から日露戦争まで数多くの日本人論が唱えられた^{cvi}。そこには「日本人優秀説」だけではないが、主流はやはり「日本人優秀説」であり、日清及び日露戦争の勝利が日本人としてのプライドを高めたのであった。

このような日本人優秀説は上記に見た雑誌や書籍のみならず、新聞でも数多く見られた。その新聞における日本人優秀説には、ロシア人との比較、あるいは、第三者から見た日本人論という形式をとったものが多く見られる。

例えば、1904（明治 37）年 7 月 18 日に東京朝日新聞の朝刊で「何故に日本は勝つか」という記事が掲載された。この記事は英国海軍中佐アルフレッド・ステッド氏によるものとして以下の様に掲載されていた。

「其軍隊組織の完備せる其兵卒の善く訓練されたる其武器の精鋭なる其将校の智謀に富める其斥候の行届ける是等のものは皆日本が今日の勝利を得たるに與りて力あること勿論なりと雖

も而も余の見る所を以てすれば是等は只單に日本人が思想に於ては東洋的の技能を、動作に於ては西洋的の技能とを兼備せる人種なることを証明するの枝葉に過ぎ其主なる理由は尚他に存するものがあるが如し。思ふに日本人の如く其發達の迅速にして殆ど底止する處を知らざるの人種は他に之を見る能はず（中略）」として、普段は平和で快活な性格の温厚なる農民が戦時中は「鬼神の如き勇者」となる理由として下記にみる二つの理由を挙げている。

第一の理由としては、日本人は「祖先崇拜の念」を持っており、これが大いなる勢力を発揮するのであると述べ、もし「不名誉の行為」があれば末代までその不名誉が語られ、逆に「名誉の死」であるならば、その功力も末代まで語られるものであるから、日本人は戦時中において、不名誉なことは絶対に出来ないという気持ちがあることを挙げている。

二つ目に、古来の日本武士の法典である「武士道の感化」によって、恥ずべき行為を戒めており、つまりは日本の兵士は「狂熱」と「分別心」の両方の利益を兼ね備えていることがあると述べている。このような第三者による「日本人優秀説」はこの時期数多く掲載された^{cvi}。

一方、ロシア人に日本人がどのように見られているのかもまた、多く掲載されている。その一例として1905（明治38）年2月7日から東京朝日新聞で計3回掲載された「日本人と露人」という記事では、ロシア側がいかにも日本人を劣等視し、ロシア人を優越視しているかを挙げ、ロシアに対する敵対心を煽っている。また、「露人の愛想の良さ」に比べて、「日本人は無愛想」であるとか、「親しみ難し日本人」で「交渉下手」であるなどが延々と述べられている^{cvi}。

上に見てきた言説は、劣等感の屈折した裏返しともとれる。「日本人優秀説」の多くは、「西洋の目」をしばしばその根拠としてきたからである。

今まで述べてきた日本人優秀説が主流であることは変わらないが、日露戦争前後には従来まではあまり見られなかった流れも出てくるのである。大国ロシアに勝った日本は、大国となる国として従来までの自信過剰を客観的に反省する言説が出てくるのである。いわゆる「国民性反省論」であり、大国として取るべき態度の模索期の始まりである。そしてその背景には日本人労働者排斥問題があった^{cix}。

このような排日運動に対する反応新聞の反応は今後の流れを象徴したものであった^{cx}。

1905（明治38）年5月には「然れども日本人が白色人種と同じく完全の市民権を米国に得るの必要なるは素より言うを須たず、日本が既に世界強国の列に入り其文明進歩の度に於て敢て欧米列国の後に拘らず、其の臣民たるものが合衆国に移住して、其の市民権をすら得る能はずといふに至つては、其の国家の威信に関する所極めて大なり、されば我政府は今回の大戦争の終了すると同時に、戦勝国の余勢を以て米国と国際裁判を開き、条約の明文を以て、米国をして日本人に帰化権を公認せしめざるべからず、是れ當局者が戦後の一事業として決して忘れざるべからず所なり、事は小なるが如しと言えども、日本の威信に関する甚だ大なるを思はば、決して軽視するべき事に非ず。」として、強気な態度をとってはいるものの、「日本人排斥の説

は、言うまでもなく、無知無識の労働者間に胚胎したるもの」として、アメリカの労働者だけでなく、日本人の労働者にも反省すべき点があることを指摘していた。

このような背景のもと、政治家の島田三郎や財政学者の神戸正雄など、多くの知識人によって「国民性反省論」が唱えられる。1908（明治 41）年 6 月の雑誌「太陽」の「人種問題」の欄では、法学者の浮田和民、農学兼法学博士の新渡戸稲造、慶応義塾塾長の鎌田栄吉らによって、外国に対する態度に関する文章が掲載された^{cx i}。浮田和民はアメリカにおける日本人排斥問題を受けて「日本に小弱者に対する国家の義狭心が足らなくて、亦た文明的強国民たる品性が欠けているから、斯様に陰悪されるのである。」と述べ、「強者が弱者を苛めると云ふが如きことは、大なる恥辱である」と主張している。さらに、新渡戸稲造も「国民が戦時に際してのみ挙国一致して外国に当るばかりでなく、平時に於ても飽まで挙国一致の精神を以て、外国に対する事を要するので、夫れには、日本国民が外国の事情を熟知し、外国人に接するに当たりては、つまらぬ偏狭な敵愾心を固持しないで、寛大なる精神を以て交際し、何處までも禮義を守つて行くことに勉めなければならぬ」としている。また、鎌田栄吉も「日本人が米国に行く以上は、米国に同化する事が最も必要である」と述べるなど、日本人の欠点を反省する論調が目立った。早稲田大学の安部磯雄がアメリカ遠征に先立って、「郷に入れば郷に従え」の精神を持って渡米したこともこのような「国民性反省論」という考えから来ていたのであろう。またこの「国民性反省論」者の中には、安部の様な反戦主義者が多く存在していた。政治家の島田三郎は日露戦争直後に、雑誌『日本人論』で、長年の習慣から武力と平和の技術との尊敬が平均されていないと主張し、人材を平和の技術に向けるよう訴えた。また次第に日本の国民は、平和の技術を重んじ、平和の能力を尊敬するようになるとして、平和事業においてこそ優秀な人材を産出するようになると、平和主義を唱えた^{cx ii}。

日露戦争の終結により国家間の緊迫状態は一時弛緩することとなったこの時代には、「日本人優秀説」や「国民性反省論」、反戦・平和主義とさまざまな主張が入り乱れることとなったのである。しかしながら大きな流れで見た場合、国家との対立を避ける流れにあった。これは上に述べた日本人排斥問題だけでなく、もう一つ日露戦争後の一種の弛緩状態からくる個人主義を背景にしていると考えられる。1905（明治 38）年 10 月に「校友会雑誌」において、魚住影雄の「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し進んで皆寄宿制度の廃止に論及す」と題した論文が掲載された^{cx iii}。これは、一高の籠城主義（注説明）の象徴である寄宿制度を問題視したものであり、一高の「校風＝尚武＝運動競技＝国家」という表象群と結びつけられるという全体主義あるいは国家主義への警告であった^{cx iv}。また、日露戦争後の一種の弛緩状態は「煩悶」青年を生み出した。この「煩悶」青年とは、失恋の末華嚴の滝から飛び込んだ藤村操に象徴されるような、自分は何のために生きているのか、またどこへ向かっているのかを悶々と考え悩む青年を指した^{cx v}。「煩悶」という言葉は明治後期、非常に流行した言葉であった^{cx vi}。従来まで

は、自分は何のために生きているかなどは考えなくてよかった。それは国家の為であると固く信じ込まされていたからである。しかし、日露戦争の終結により、列強大国の仲間入りという一大目標を果たした日本国内では、国家の為ではない個人としての自覚を生むこととなったのである。

ここまでの日本国内の大きな流れをつかんだ上で、ひとつ野球めぐるの位置づけに関する変遷を見てみようと思う。

武士的競技から 1907（明治 40）年紳士の遊戯になり、それが 2 ヶ月後すぐに変更されたところでは説明出来ると思う。つまり、武士的競技と位置づけられた背景には「日本人優秀説」に見られる様な国粋主義に支えられているものであったと考えられる。故にその野球に対する人気も納得出来るものがある。その後彼等が野球を「紳士の競技」と位置づけたのは、アメリカ土産の野球術を「麗しき気風」をもったアメリカ人のような「紳士の」なものとして感じていたからであろう。しかしながら、国内状況は「西洋」に対して敏感な時期であったのである。アメリカ土産の野球術だけでなく、野球そのものを世間一般に広めようとしていた早稲田にとって、「西洋」を感じさせる表象は、早稲田の目的を阻害するものであった。上に見た通り、日露戦争後の国内では、「日本人優秀説」を筆頭に、「国民性反省論」など多くの主義主張が生まれていた。また、一高的のような「国家」と間接的に結びつけられる籠城主義も批判されるという個人主義への流れもあったのである。ここで彼等が選んだのがポピュラーサイエンスに便乗した「科学的」という言葉なのである。西洋や日本といった国家を感じさせない言葉、つまりは科学の持つ「百般の事物を推考論定する」という「萬能」的要素を取り入れることによって、ハイカラと言われたアメリカ土産の野球術は一大革新となり広く受け入れられたのである。もしかすると彼等はこの「科学」の「萬能」性を考慮して名付けたわけではなかったかもしれない。しかしながら、結果として「科学的」という言葉は野球を「萬能」化させ、一大革新へと導いたのである。

第 3 節 「修養」から「教育」へ

ここまで「科学的」なるものが安部の言う「国民」にとって必要な教育的要素を持ち、「百般の事物を推考論定する」という「萬能」な性質を持つということは理解出来た。安部が「科学的野球」に付け加えたものは一高の時代とは違う合理的なものではあるが、エリートにも必要な国民にとっての「精神修養」であった。言い換えればそれは「教育」と言える。安部は、早稲田大学野球部長であるとともに、「教育者」でもあった。これは一高野球部と早稲田野球部のありかたの大きな違いであった。「修養」とは自ら行なうものである。安部が唱えた「野球の三徳」は修養ではあるものの、「安部磯雄」から「学生」へ与えられたという段階で「教育」へと変化したのである。さらに、安部は、「武」的なるものを否定する人物でもなかった。しかし、

一高のような非合理的な精神修養は、「亂暴な練習」として否定した。安部の思いは、野球を広く広めることであったので、一高のような「武」的な修養を求める人々、さらには、「国民」にも野球を受け入れて欲しかったのである。そこで、彼が持ち出したものは「科学」という「百般の事物を推考論定する」「萬能」で「教育的」な言葉であったのだ。つまり、エリートにとっても「国民」にとっても「教育的要素」を持つものとして見え、受け入れられたということである。だからこそ「科学的野球」はエリートのみならず「国民」にも受け入れられるものとなっていたのである。

最後に、「科学」的なものと「武」的なものの関係について端的に現れている当時の文部省普通学務長である澤柳政太郎の記事を引用したい^{cxvii}。

「日本魂も大切である、併しながらそれと共に科学の力と正則の規則立ちたる教育の力とは決して軽んずべきものではない、例を挙げるまでもなく旅順の包圍に於ては實に見事なる日本の歴史に嘗て無い如き勇敢なる武士的精神が発揮されたのでありますが、併しながら其勇敢なる武士的精神も學術の應用と相須つて初めて功を奏した、若し學術のみであつたならば、彼の結果を見る事が出来ない、又日本魂だけではあつたならば徒らに人命を損するのみであつて矢張彼の結果を見る事は出来なかつたであらうと思ふ、精神があれば宜しい、學問教育はそれ程の価値のないものであると云ふやうな意見が動もすると起る、然るに近世の戦争は教育學問の大切なことを証明するものである、普魯西と奧太利の戦争に於ても或は佛蘭西と獨逸との戦争に於ても或は日清の戦争に於ても又今回の戦争も矢張それを証明して居るものであらうと思ひます、」

文部省普通学務長である澤柳が以上のような発言をしたことは興味深い。「科学」は「武」的なものと共存可能なものである。このことは、野球に「武」的なものをもとめる人にも、「科学的」ということが受け入れられるという何よりの証拠ではないだろうか。

lxxxvi 「朝日新聞」(東京)、1903 年、10 月 26 日

lxxxvii 同紙、1908 年、6 月 18 日

lxxxviii 同紙、1910 年、6 月 29 日

lxxxix 「読売新聞」、1907 年、7 月 6 日

xc パウル・ケーラス、長谷川天溪訳、『科学的宗教』、鴻盟社、1899 年

xci ニューマン・スミス、宮崎八百吉訳、『科学的信仰』、警醒社、1908 年

xcii 「朝日新聞」、1903 年、10 月 16 日

xciii 同紙、1906 年、10 月 8 日

xciv 「読売新聞」、1910 年、10 月 5 日

xcv 同紙、1910 年、1 月 11 日

xcvi 同紙、1907 年、8 月 15 日

xcvii 原克、『身体補完計画 すべてはサイボーグになる』、青土社、2010 年、9-10 頁

xcviii 同掲書、9-10 頁

xcix 「朝日新聞」、1908 年、8 月 26 日

° 横田順彌、『熱血児 押川春浪 野球害毒論と新渡戸稲造』、三一書房、1991 年、15 頁

ci 明治 33 年に科学書が多く出ているが、この多くは専門書で外科や内科に関する書物である。これらの

多くは海外の抄訳本であり、ポピュラーサイエンスとしての科学書ではない。

cii 前掲紙、1910 年、12 月 3 日、4 日

ciii 南博、『日本人論 明治から今日まで』、岩波書店、2006 年、26 頁

civ 例えば、西周や西村茂樹は森の「改文字論」を指示していたし、高橋義雄はの人種改造論は、肉体的劣等を西洋人との結婚ということを断片的にはあるが、示していた。

cv 南、前掲書、51 頁

cvi 1905（明治 38）年 12 月に雑誌『日本人』で小山正武は「日本国民の特性＝其健全の発達の必要」という記事を掲載している。ここで小山は、日本人の国民性を形成する要素は、「建造の歴史的事情」と「地理的關係」であると述べ、その日本の歴史的事情は他に例を見ないとしている。また、国民と元首とが親子のように親密で、相互の敬愛の情が極めて深く、平時は恭儉慈愛、勤勉、服従を行い、緊急時には挙国一致して団結し、献身犠牲を行なって戦場に臨むと同時に、弱小を憐れみ貧困を救い、敵さえも愛するのが日本人の特性であると主張している。

cvi 1904（明治 37）年の 6 月 10 日に東京朝日新聞に掲載された「日本人の骨格論」という記事で、欧米の学者であるアーヒング・ハンコツ氏の説を以下の様に紹介している。「日本人の体格は謂う迄もなく頗る劣等なる者の一なれども其熱誠なる精神の作用は体格の羸弱なるを補ふが如し精細に彼等の体格に不似合なる強健を看取すれば大に驚くべき者ありて存すされど怪しむ勿れ精神の健全は一面肉体の強壯を意味するが如く肉体の強壯も亦精神の奮闘によりて補ふことを是生物学者の所謂心身相関の理なればなり。（以下略）」この記事では上記のことに加えて、日本人が「食物粗悪」で「運動不足」と指摘するも、新鮮な空気が流れる家屋に住むから衛生的で、これら食物粗悪と運動不足を補えるとするなど指摘もあるが、全体として日本人は優秀であることを述べている。

cvi 前掲紙、1905 年 2 月 7 日

cix 日露戦争前後にアメリカやヨーロッパなどでは、黄色人種脅威論いわゆる黄禍論が盛んに唱えられ、排日運動が行なわれた。もともと、中国に対して向けられていたが、日露戦争をきっかけとして日本にも向けられるようになった。特にアメリカではハワイやカリフォルニアにおける日本人の移入に伴う雇用の減少を危惧して、在米日本人労働者の市民権を剥奪する法案や日本人の渡米を原則禁止とする法案を議会に提出するなど排日運動が激化する。これがいわゆる日本人排斥問題である。

cx 前掲紙、1905 年 6 月 23 日

cx 浮田和民、新渡戸稲造、副島義一、高田早苗、鎌田栄吉、「人種問題」、「太陽」、第 14 巻第 9 号、博文館、1908 年、177-200 頁

cxii 南、前掲書、66 頁

cxiii 魚住影雄、「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し進んで皆寄宿制度の廃止に論及す」、「校友会雑誌」、第一高等学校校友会、第 150 号、第 151 号、第 152 号、1905 年

cxiv 鈴木康史、「スポーツは文化？-大正教養派と文化の系譜学に向けて-」（中村敏雄）『現代スポーツ評論』、2001 年、第 4 号、71-81 頁

cxv 筒井清忠、『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』、岩波書店、1995 年、6 頁

cxvi 生方敏郎、『明治大正見聞史』、中央公論者、2005 年、102 頁

cxvii 澤柳政太郎、「戦争と国民の精神」、「太陽」、博文館、第 11 巻第 11 号、1905 年、71 頁

終章

第1節 本研究のまとめ

1905（明治 38）年に早稲田大学がアメリカ遠征を行ったことにより持ち込まれた「科学的野球」とは、一高の「獐猛なる一高式練習」とは異なる合理的な精神修養をもったものであった。一高の精神修養とは非合理的であるからこそ、その意義を持つものであったが、早稲田はその極端に非合理的な練習を否定したのであった。しかし、アメリカ遠征から帰国した早稲田を待っていたのは「ハイカラ」批判であった。彼等はこのアメリカ遠征に複雑な気持ちをもっていたであろう。アメリカでの経験は、アメリカ人に対する彼等の意識を変革するようなものであったからである。ここで、この「ハイカラ」を脱却するために彼等が持ち出した言葉は「科学」であったのだ。時代はまさに「科学萬能の時代」であったのだ。さらに、安部はこの野球における「科学」に「精神修養」という依然日本球界に根強く起こる価値観を加えたのである。この安部によって加えられた「精神修養」は、「科学」と結びつくような「合理的」なものであり、さらに「国民」にとっても、一高のようなエリートにも必要な「教育」であったのだ。

この「科学萬能の時代」における「科学的野球」という総称は、「国民」にとって「ハイカラ」とは映らない教育的なものに見えたであろう。さらに、「武」的なものを野球に求める人にとっても必要なものとして映ったであろう。安部の「野球を広めたい」という思いが、この科学「的」という言葉に集約されているのである。

つまり、早稲田が持ち込んだこの「科学的野球術」とは、エリートにとっても「国民」にとっても必要な「教育」としての「精神修養」という側面があり、「百般の事物を推考論定する」「萬能」な性質も持つ「科学的」という言葉のイメージを反映した野球技術であったのである。そこには、野球を「広く我國民に愛好せらるる」ものとする早稲田の思いが集約されていたのである。

その後、野球は明治末から大正にかけて大衆化へと進んでいくこととなる。1914（大正 3）年には、早稲田、慶應、明治による三大学リーグが始まり、学生試合初の入場料が徴収され、また全国各地に点在する旧制高等学校が主催となり、地区大会を開いていたこともあって、1915（大正 4）年には大坂の豊中球場で全国中学校優勝野球大会が行われたのである。さらに、1925（大正 14）年の秋には、早稲田、慶應、明治、法政、立教、帝大（昭和 24）年東京大学に改称）による東京六大学リーグが開幕するのであった。また選手の増大だけでなく観客数も日に日に増大し、雑誌や新聞にもその大衆化は見て取れた。1908（明治 41）年に野球の専門雑誌『月刊ベースボール』（明治 44 年より『野球界』と改題）が創刊され、また朝日新聞、読売新聞においては遠征前の 1904（明治 37）年の野球に関する記事数は合計 6 件（朝日 3 件、読売 3 件）であったのに比べ、1914（大正元）年には 2 紙合計 230 件（朝日 127 件、読売 103 件）と大きく

数字を伸ばした。

もちろんこの大正時代における野球の大衆化が早稲田の「科学的」野球の輸入によってのみ起こったのではない。生活水準の上昇による生活の変化や学生数の増加もその一端を担っているであろう。しかしながら、早稲田大学のアメリカ遠征と「科学的野球」が大衆化のきっかけ、あるいは起爆剤となった可能性は十分にあるであろう。

参考文献

[1 次資料]

【新聞】

1. 「朝日新聞」(東京) 1905 年 11 月 10 日
2. 同上紙、1905 年 11 月 14 日
3. 同上紙、1905 年 10 月 30 日
4. 同上紙、1905 年 10 月 30 日
5. 同上紙、1905 年 10 月 15 日
6. 同上紙、1905 年 5 月 11 日
7. 同上紙、1905 年 11 月 16 日
8. 同上紙、1905 年 6 月 21 日
9. 同上紙、1903 年 10 月 26 日
10. 同上紙、1908 年 6 月 18 日
11. 同上紙、1910 年 6 月 29 日
12. 同上紙、1903 年 10 月 16 日
13. 同上紙、1906 年 10 月 8 日
14. 同上紙、1910 年 1 月 11 日
15. 同上紙、1907 年 8 月 15 日
16. 同上紙、1908 年 8 月 26 日
17. 同上紙、1910 年 12 月 3 日
18. 同上紙、1910 年 12 月 4 日
19. 同上紙、1905 年 2 月 7 日
20. 同上紙、1905 年 6 月 23 日
21. 同上紙、1905 年 10 月 30 日
22. 「読売新聞」、1907 年、7 月 6 日
23. 同上紙、1910 年 10 月 5 日
24. 同上紙、1931 年 5 月 21 日

【雑誌・論文】

1. 安部磯雄、「余の野球観」、「野球年報」5 号、野球年報編集部、1907 年
2. 安部磯雄、「早稲田大学の野球選手」、「中学世界」、博文館、第 8 巻第 10 号、1905 年
3. 魚住影雄、「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し進んで皆寄宿制度の廃止に論及す」、「校友会雑誌」、第一高等学校校友会、第 150 号、第 151 号、第 152 号、1905 年

4. 浮田和民、新渡戸稲造、副島義一、高田早苗、鎌田栄吉、「人種問題」、「太陽」、第 14 巻第 9 号、博文館、1908 年
5. 鵜澤聡明、「学生と精神修養」、「校友会雑誌」、第一高等学校校友会、第 83 号、1899 年
6. 小山正武、「戦後國民自覚修養の要義」、「太陽」、博文館、第 12 巻第 5 号
7. 河野安通志、「投球に對する注意」、「野球年報」5 号、野球年報編集部、1907 年
8. 「校友会雑誌」号外、付録、第一高等学校校友会、第 58 号、1896 年
9. 「校友会雑誌」号外、付録、第一高等学校校友会、第 59 号、1896 年
10. 澤柳政太郎、「戦争と国民の精神」、「太陽」、博文館、第 11 巻第 11 号、1905 年
11. 田部信秀、「野球に就いて」、「野球年報」6 号、野球年報編集部、1908 年
12. 橋戸信、「米国の野球界」、「野球年報」4 号、野球年報編集部、1905 年
13. 「野球部史」、「校友会雑誌」号外、第一高等学校校友会、第 2 号、1903 年

【書籍】

1. 安部磯雄、『社会問題解釈法』、東京専門学校出版、1901 年
2. 安部磯雄、『地上の理想国端西』、平民社、1904 年
3. 安部磯雄、『理想の人』、金尾文淵堂、1906 年
4. 安部磯雄、『野球案内』、亀井支店書籍部、1907 年
5. 内村鑑三、『近代に於ける科学的思想の變遷』、聖書研究会、1910 年
6. 押川春浪、『海底軍艦』、桃源社、1970 年
7. 木村毅、『都の西北』、ベースボールマガジン社、1978 年
8. 慶応義塾野球部史編集委員会編、『慶應義塾野球部史 上巻』、ベースボールマガジン社、1960 年
9. 中馬庚、『野球』、前川善兵衛出版、1897 年
10. 高橋雄次郎、『新式ベースボール術』、四海堂、1898 年
11. 田中義能、『最新科学的教育学』、同文館、1909 年
12. 飛田穂洲、『学生野球とは何か?』、恒文社、1974 年
13. 飛田穂洲、『ベースボール 外野及び練習篇』、実業之日本社、1928 年
14. 飛田穂洲、『早稲田大学野球部百年史 上巻』、早稲田大学出版、1981 年
15. ニューマン・スミス、宮崎八百吉訳、『科学的信仰』、警醒社、1908 年
16. パウル・ケーラス、長谷川天溪訳、『科学的宗教』、鴻盟社、1899 年
17. 橋戸信、『最近野球術』、博文館、1905 年
18. 橋戸信、『野球虎之巻』、運動世界社、1911 年
19. 芳賀矢一、『國民性十論』、富山房、1908 年

20. 早稲田大学野球部選手編、『ベースボール』、彩雲閣、1907 年

[二次資料]

【雑誌・論文】

1. 小野瀬剛志、「野球害毒論争（1911 年）に見る野球イデオロギー形成の一側面-「日本のスポーツ観」再考試論-」、『スポーツ史研究』、スポーツ史学会、2002 年
2. 木村吉次、「いわゆる「野球害毒論」の一考察」、『中京体育学論叢』、中京大学、1962 年
3. 木村吉次、「明治時代における運動の価値論の一考察-「校風論争」を通じてみた＜運動＞の日本的同化の倫理」、『体育学研究』、社団法人日本体育学会、1961 年

【書籍】

1. 生方敏郎、『明治大正見聞史』、中央公論者、2005 年
2. 伊丹安広、『野球の父 安部磯雄先生』、1965 年
3. 神田順治、『子規とベースボール』、ベースボールマガジン社、1992 年
4. 君島一郎、『日本野球創世記』、ベースボールマガジン社、1972 年
5. 日下裕弘、『日本スポーツ文化の源流：成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究 その形態および特性を中心に』、不昧堂出版、1996 年
6. 功力靖雄、『明治野球史』、逍遙書院、1969 年
7. 坂上康博、『にっぽん野球の系譜学』、青弓社、2001 年
8. 菅野真二、『ニッポン野球の青春 武士道野球から興奮の早慶戦へ』、大修館書店、2003 年
9. 佐山和夫、『明治五年のプレーボール 初めて日本に野球を伝えた男-ウィルソン-』、の本放送協会、2002 年
10. 鈴木康史、「スポーツは文化？-大正教養派と文化の系譜学に向けて-」（中村敏雄）『現代スポーツ評論』、2001 年、第 4 号、71-81 頁
11. 筒井清忠、『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』、岩波書店、1995 年
12. 富永俊治、『早慶戦百年 激闘と熱狂の記憶』、講談社、2003 年
13. 中沢不二雄監修 浦岡偉太郎、『野球史』、奈良日新聞社、1955 年
14. 仲新、『明治の教育』、至文堂、1967 年
15. 長山靖生、『奇想科学の冒険 近代日本を騒がせた夢想家たち』、平凡社、2007 年
16. 長山靖生、『千里眼事件 科学とオカルトの明治日本』、平凡社、2005 年
17. 西川長尾、『国境の越え方 国民国家論序説』、平凡社、2001 年、130-132 頁
18. 原克、『身体補完計画 すべてはサイボーグになる』、青土社、2010 年
19. 南博、『日本人論 明治から今日まで』、岩波書店、2006 年

20. ロバート・ホワイティング、玉木正之訳、「和をもって日本となす」、角川書店、1991 年
21. ロバート・ホワイティング、松井みどり訳、『菊とバット』、文藝春秋、1991 年
22. 柳田國男、『明治大正史 世相篇』、講談社学術文庫、1993 年
23. 大和球士、『新説 日本野球史 大正篇』、ベースボールマガジン社、1977 年
24. 大和球士、『新説 日本野球史 明治篇』、ベースボールマガジン社、1977 年
25. 横田順彌、『壮快遊絶〔天狗倶楽部〕明治バンカラ交遊録』、教育出版、1999 年、23-42 頁
26. 横田順彌、『熱血児 押川春浪 野球害毒論と新渡戸稲造』、三一書房、1991 年
27. 早稲田スポーツ百周年記念誌編集委員会編、『早稲田スポーツ百周年記念誌』、2000 年